オーストリア「皇太子」の日本訪問（3）

フランツ・フェルディナントの訪日日記
《1893（明治26）年８月２日～24日》（その３）

渡辺　肇

倉敷芸術科学大学大学院人間文化研究科

（2005年９月30日　受理）

８月５日、熊本にて（承前）

親王は地図と一覧表を手にして、既に言及した様に、熊本が大きな役割を演じた1877（明治10）年の叛乱を非常に興味深く説明した。７カ月後にやっと鎮定されたこの薩摩の叛乱は日本が近代化されて存立する為の非常に大きな試練であった。その危険な運動の精神的支柱は西郷吉之助将軍[33]であった。彼は天皇の権力再掌握[34]の際に最大の功績を果たしたのであるが既に1873（明治６）年から拗ねて不平を抱いて自分の故郷に滞在した。西郷は薩摩に同じ考えの仲間と協力して侍の為に私学校を設立した。その学校では侍たちに漢文と軍事教練の教育が施された。ここで学ぶ侍たちの数は徐々に増加して30,000人になった。これらは西郷に盲従的に従う軍隊を形成した。

1877（明治10）年１月には遂に長期的に準備された運動が爆発した。西郷は14,000人の叛徒の先頭に立ち進撃した。この人数は熊本への進撃の過程で連続して増加した。これらの叛徒の一部分が包囲攻城戦に参加し、他の9,000人が有栖川宮[35]の指揮の下に小倉から熊本に向けて進撃してくる官軍に対抗する為に北方に向かい進撃したが間もなく田原坂で撃退された。その事で熊本の包囲攻城戦は断念せざるを得なくなった。一連の小さな戦いの後に叛徒の拠点であった都城と延岡が官軍の手に落ちた。それでも、西郷は阻まれなかった。最後まで西郷に忠誠を尽くした500名の先頭に立って鹿児島に自らが蓄えた豊富な軍需品を強奪しようとした。しかし９月24日には既に鹿児島郊外の城山で西郷とその小人数の一団は15,000人の官軍に包囲された。勇敢な叛徒たちは間もなく殺害されるか、捕縛される事になった。頭を刎ねる事で指揮官に最後の友人としての務めを果たした戦友別府[36]に介錯され西郷は死んだのである。しかし別府自身も腹を切り裂く事つまり切腹をして死んだのだ。

稜堡に幾張かの天幕が張られた。その中で冷たい飲物とアイスクリーム[37]が振舞われた。専属副官が熱帯的酷暑の下でその役割の評価に値する尽力をしてこの国では良くやる様に我々に風を送って涼しくしてくれた。我々の前に展開したのは市街地や輝いている光景や街を囲んでいる丘陵の列なりや要塞等々への見晴しであって尋常でなく絵画のように美しく観察者がこの絵画的光景の印象に没頭すればするほど人を惹きつけるのである。稜堡か

らおよそ100m離れて古き築城技術の最後の名残として木造で高さのあるパゴダの様な搭[38]が聳え立っている。その搭はいわば歴史的なシンボルとして保存されているのであって今は見張台として用いられるのである。険しい木製の階段を攀じ登ってこの搭の４階にまで上がって目眩がするような高さから下を見晴らした。様々な絵画的な描写が示している様に火薬が未知であり飛び道具が弓矢で代表されていた古き良き時代には総ての城壁や張出している角がこの様な搭を持っていたのだが現在では少なからぬ要塞が奇妙な外観を失わってしまわねばならなかったのは確かだ。

風通しの良い高みからこの城の堂々たる占有域とそこに建設された多くの建物が見られた。昔の城から残存する建物の他に、我々の眼の下には、歩兵第13聯隊と歩兵第23聯隊の兵営が横たわっている。それらは近代的な手本に従って両翼を有する大建造物方式で建設されており広大な営庭が配置されている。そこでは部隊が白い夏の軍服を着用して、小隊教練と中隊教練を行なっていた。少し離れて騎兵営[23]が１つと砲兵営[24]が１つある。特に前者は兵員用兵舎と長く延びる厩舎と鍛冶作業廠、病馬廠を有し故国の兵営を思い出させ嘗ての騎兵聯隊長[39]を寛いだ気分にさせた。

騎兵営[23]の参観は予定には入ってはいなかったのであるが私の出身兵科[40]が齎す当然の関心からこの軍事施設を参観出来る様にまたそれに絡んで乗馬の一隊を出動させるようにと私は親王に頼んだ。私はこの様な願いを達成した事を悔やむ理由が無い。私が当地で見る事を得たのは正当なる驚きの行為に沈殿する事であったからだ。欧州を模範とした騎兵の設置がほんの少し前に為されたばかりであるが獲得した成果は正しく抜群のものとして標示されるのだ。否定し難く回避可能な欠如がまだ殆ど証明されていないのであるから私の予想を遥かに上回ったのだ。日本の騎兵組織に従えばこの兵科は各３個中隊からなる６個の師団騎兵大隊[41]と２個中隊からなる１個近衛騎兵大隊から構成されている。各師団騎兵大隊は497名の兵員と459頭の馬匹の総兵力が規定されている。

厩舎はそれぞれ２個小隊分の場所に充てられており木造であり非常に風通しが良かった。馬房には古くなった敷藁(シキワラ)はなかった。馬匹の外観は何頭かは栄養十分で毛の輝きが目立ってはいたが大体に於いては多くの改善の余地がある。かなりの馬匹が非常に痩せていた。多くの馬匹には鞍傷があった。目に付いたのは多くの雄馬たちであった。１日に３回与えられる飼葉は大麦と本当に悪い葦の干草からなっている。陸軍当局はそれまで使用されていた鞍を処分してドイツ型を模倣して製造した鞍に交換させたのであるが私には有用とは思われなかったしその際に導入された紐で作られた帯に付いてもそうである。馬嚢は後部に肩外套は各々３発の弾薬を納めた弾薬盒を２個づつ容れる小袋２つと共に前部の鞍立に帯革で締めて固定されていた。馬銜(ハミ)[42]は以前には我国で普通一般には非常に良く似ていた馬勒全般と同じ様であったが新しい時代には長い馬銜下を付けた英国式の馬銜に代替されてしまったが、その様な事は私の見方からすれば何の利益も齎さない。全く適当でないのは薄過ぎて八重に折りたたまれた草色の鞍下敷である。この様な鞍下敷では頻繁にあ

ちこちに発生する文字通りの鞍傷を生じさせる原因となる。

兵員室は木で張られていて風通し良く清潔に保たれた場所であった。その中では兵卒に支給されている軍服と軍靴の豊富な蓄えが私の注意を引いた。各人は礼服と演習服と夏服の他にも、３着ないしは４着の（手首のところに階級を表示する）筋がついた上着からなる一揃えの非常に快適な衣服を保有していた。寝台の上に取付けられた棚の上には至る所に清潔な茶碗が置かれていた。兵卒は良好で逞しい外観をしていたが、１日に３回の食事を給養される。その食事は大抵は国民食である御飯と魚か肉の十分な副食から構成されている。

騎兵の兵器について言えば刃が薄く細身である軍刀が私の目に付いた。柄(ツカ)の遊びが余りにも少ないので私にはこの兵器が子供用の小型軍刀の様な印象を与えた。騎兵銃[43]は我国に於ける様に革紐で固定されていないので兵員の運動に応じて背面であちこちをぶらぶらする。下士たちの回転式拳銃は軽くて扱い易く我国で普及しているものより遥かに実用的である。

我々が兵営を参観している間に非常に好意的な軍事的印象を与えようとした指揮官の命により営庭に１人の将校の指揮で14人の下士卒[44]が乗馬して出動した。この隊は、我々の前で小隊訓練の総ての展開を各々の駆け方で実施した。日本人がそれ自体我国の操典を模倣したドイツの騎兵操典を手本として採用したので、この訓練は完璧に我が国軍の騎兵小隊の動作に等しかった。それを逸脱している１つの例外は上官を出迎えて敬礼する際に軍刀を頭上に上げてから柄を顔の前に下して止める事であった。総ての動作、方向転換、停止、行進、発進が、２頭あるいは４頭で静かに遂行された。訓練の最後に兵員が個々に我々の周りに円を描きがら騎行した。その事が馬匹の質と人々の乗馬の仕方に精確な判断を与える機会を齎したのだ。日本政府は何年も前から若干のハンガリー産の種馬を買付けさせて国内の各地方に配分した。これらの種馬から生まれたのが日本の現在の兵卒用馬匹である。この馬匹は一目でハンガリーの血筋を現している。しかしながらこれらの種馬の選択は非常に幸運な選択であった様には必ずしも見えないのである。子孫たちは動作は概ね良好ではあったが強靭な下顎と時たまは不良な背を持ち短くて欠点のある首を有していた。我国の馬政委員なら私が参観した馬匹に対しては低級馬の格付をする事だろう。軍馬補給が国営牧場から行なわれない限りは日本騎兵の馬匹は１頭あたり200グルデン[45]に達せぬ驚くべき安値で直接に部隊によって調達されている。

我々の考えでは下士卒の乗馬術は他に幾つかの改善の余地がある。既に騎手が馬の前部に固着されている肩外套と弾薬盒格納袋の所為で拳を非常に高く保つ様に強制されているので不安定な操縦を余儀なくされる。それで馬は大抵は下顎が不自然であり大抵は余り乗りこなされてはいないので一般的に兵員は馬のきつい鐙(アブミ)にも拘らず非常に荒っぽく徘徊する。しかし下士卒に於ける柔軟で良好な座法を見損なってはならぬ。そして私は確信するのであるが欧州の優秀な騎兵聯隊の１個小隊と完璧に同等である様になる為には我々が参

観した様な小隊は欧州で鍛え上げられた指揮官の手によって自然な技能と兵員の良好なる意思の下に短期間で十分に訓練されていなければならないであろう。何れにせよ我々が参観した日本の騎兵小隊の様に上手くは任務を長く達成できない大陸[46]の騎兵隊の演習を実際に私は見た事があるのだ。日本騎兵の名誉の為に強調する必要があるのはこの参観は予定されていたものではなく即興で行なわれたものだと言う事とそれ故にこの訓練は他の場合には良くやる様に前以て適切に稽古しておく事が出来なかったという事だ。率直な称賛と心からの感謝の言葉で実直な大隊長[47]に部隊の業績を祝って兵営を退去した。歩兵と砲兵を参観する時間が最早少しも許されなかったと言う事に対しては強い後悔なしとは言えなかった。

能久親王は市街地から2kmも離れないで位置する水前寺と言う公園まで我々に同行した。この公園は以前には細川家[48]に属した別邸の庭を形成した。日本人は行楽の場所として自分たちの役に立てていてこの公園に正当にも少なからざる誇りを有している。この公園は日本の庭園芸術の典型であり全く独特な性格の名所であるからだ。玩具箱から取出した様な喬木や潅木や花々や丘陵や岩や池や水面であり上品な配置や様々な変化や優美な次元に維持された庭園として整えられている印象を受ける。既に道路に沿って両側に沢山の人々が集合済みであったし公園の入口には大勢の高位高官が我々を待ち焦がれていた。その人たちの代表が紹介されたが他の人たちは既に整列させられて人垣を作っていた。我々はその人垣の間を通り抜けて旗と木の葉で飾られ小屋に達した。そこでは軽い食べ物と御茶が振舞われた。御茶は日本人が飲む様なやり方で酸葉(スイバ)[49]ソースに似た苦い味がする緑の煎じ汁として我々に提供されたが私の口には全く合わなかった。

日本では殆ど緑茶だけが産出され茶の木の栽培には平地かなだらかに傾いた斜面の土地が充てられる。最高の品質の日本茶つまり抹茶と玉露は殆ど国内でのみ消費されるのに対し輸出には普通は二級品の茶葉で足りる。爽やかな飲料を摂取して重苦しい気温の作用をある程度無力化しようと我々が努めている間に素晴らしい昼間の花火が打上げられた。

金儲けを抜け目無く思案している熊本の商人たちは公園から遠くない所に位置する野外劇場[50]で我々を魅惑するために日本の芸術と芸術産業の総ての考えられる限りの産物の展示会を催した。そこには華麗な品々や青銅製品や漆器類から選び抜かれた諸物そして竹や陶器や絹製品から技巧を凝らして構成され製作された物品そして何よりも軍装品や武器があった。その中でも特に名前を挙げるべきであったのは技巧を凝らして装飾された刀剣であった。要求された価格は非常に高かったが敬意を表す為に若干の買物をした。その事で天皇の従兄である我が親王[51]を少なからず楽しませた様に見えた。

朝食は我々の家で振舞われ衛戍地の高級将校たちが陪食した。この朝食で熊本滞在を終えた。親切な能久親王は更に軍隊を道路に沿って整列させた上で駅まで同行した。礼砲の響きの下に九州島を熊本から北方の終点門司まで縦断する九州鉄道会社の路線へ御料列車で出発した。

この鉄道路線は若干の比較的に大きな都市の側を通る。例えば以前は大名の有馬氏の居城であって現在は筑後の国の中心地である久留米；更には那珂川によって分割されている双子の都市である博多―福岡；博多は福岡港を持ち嘗ての商業地域を含む。福岡は武家地域として数千人の侍の住居を有していた。そして現在は筑前の国の中心地である；最後に終点の直前に豊前の国の中心地である小倉が来る。鉄道路線は直ぐに西に曲がりそれから若干の間海岸に沿って北方に延びて博多の所で大きく弧を描いて東にそして北東に門司市に向かって曲がる。

比較的大きな場所の駅にだけではなく列車が全く停止しない様な比較的小さな駅にも大勢の人々の先頭に知事だとか軍隊の指揮官とかあらゆる範疇の高位高官たちが私を歓迎しているのが見えた。しかしながら私は休養を取る事が出来る様に睡眠中であるとの口実を設けさせて列車の停車場で計画されていた紹介や挨拶から逃れ、参列している名士たちが御料車の中に来て名詞を渡すだけに制限させたのである。

全路線に沿って広範囲に我々を警護する為に警察の処置が為された。鉄道線路を横切る道路の至る所には名誉と責任の全意識を以って敬礼する警備員が立っていた。私は確信するのだが日本で未だ嘗て限られた空間に警察権力を展開する今回の様な措置が見られた事は絶無であろう。だが私の生涯に於いて当地に於けるほど監視されているのを感じた事が絶無であるとも間違いなく私は主張する事を許されるであろう。

特別列車は狭軌の鉄道線路の上を常に飛ぶ様に走行した訳ではないので、単に目的地に向うだけではなく御料車の展望台に立って明るい風景を見遣ると言う事が本当の楽しみを形成した。この国の特徴は愉快で感じの良い住民の各人が一致して調和が取れている事である。住民がその本性に於いて風土の特徴に適応しているのだと逆に主張せられる事はあるにしても。何処でも感じの良い谷間が開ける。地域を活性化して溌剌とした緑の中から無数の村落が姿を覗かせる。山々と丘陵は数多の場所で針葉樹によって豊かに植林されている。その下には密集した笹藪が生えている。残念ながら完全に禿山になっているかなりの面積がある。その事はこの国の大きな木材需要からは驚くべき事ではない。伐採が行なわれた場所では雑草の様に笹が生茂っている。時折り全く突然に谷底から半球形の聳え立つ様な丘が見つかる。その丘には下方にしばしば吃驚する様に形成された松を持つ豊かな植生がある。その様な植生は何度も日本庭園の自然の中でそして漆塗りの箱や花瓶などでの多かれ少なかれ成功した描写に於いて既に見た事があったのだ。

小倉の近くの鉄道が海に接近した所で沈み行く太陽の華麗な色彩の戯れが注ぐ海に我々は挨拶した。その海の深い海底から山々の金色に染まった頂の反射像が上方に光っていた。何百もの雪の様に白い銀色の列が我々の列車に付いて来た。

終点駅の門司には私に対する歓迎式典が待っていた。投錨している３隻の日本の軍艦、八重山、高尾、満珠が既に太陽は沈んでいたのに登索礼[12]を実施し礼砲を発射した。門司は対岸に位置する下関と事実上１つの港を構成するのであるが新開地であって九州鉄道が

この地を終点にした1891（明治24）年になって初めて繁栄する事になるのである。小蒸気船[52]での短い航海の後で下関自身にそしてその事によって大きな島である本土に上陸するためにファン・デア・カペレン海峡[53]すなわち下関海峡と言う名である当地の１海里の幅も無い程の海峡を横断した。私が薄暮の中で判断した限りでは我々は再び足を素晴らしい地面の場所に付けたのだ。港湾都市の北方には険しいけれども高くは無く部分的には森に覆われた丘の連なりが聳え立っていた。これは厳しい北風を阻み下関の南に向いた位置と共にこの場所に非常に好都合な気候を保証するのである。山陽道―この意味は山々の日の当たる地方と言う意味であるが―とこの地方は称する。その地方の長州[54]の国に下関の市街は位置するのである。この町は本来３km強の長さの通りからなっている。要塞砲兵の１個大隊[55]が整列する隊列の前を我々に指定された港を見晴らす家[56]に歩を進めた。その家には我々が既に御馴染になった日本の他の家屋に於いてそうであった様にこの国では何時もそうである快適さが支配する感じの良さがあった。

海峡の入口は要塞化され堅固に防御されていた。と言うのは既に小倉の北方から始まり７つの砦からなり近代的に建設されている砲台を有する要塞設備が彦島を越えて下関方面に伸びているからだ。この要塞設備は明らかに日本人が1864年に持った経験の賜物である。当時、英、仏、蘭、及び、北米合州国の軍艦からなる１艦隊が日本側の非常に毅然とした抵抗にも拘らず下関に艦砲射撃を行ったので長州の大名が和平を乞い7,500,000グルデン[43]を支払わねばならなかったからだ。この暴力行為はこの大名が下関海峡を通過しようと総ての外国船を砲撃させる様に指示したから生じたのであった。

夕食の際には日本語しか話せないので私に対して沈黙を守った２人の政府高官の間に私は座ったのであるが、その夕食の後に照明された海で魚捕りが催された。我々は１隻の大きな輸送船で御祭のように照明された市街地の海岸に近接して50艘ほどの漁船がそこここに漂っている場所まで航行した。各漁船は船首に激しく燃上る松明の光を載せていた。漁撈の原理は当地でもオワラハ近くで威厳のあるツァンベアリン兵曹長[57]が使用したのと総てが明らかに同じであった。違うのは魚がツァンベアリンでの様に突かれるのではなく小さな捕獲網で捕まえられる事であった。大勢の高位高官が我々に同行しており彼らが乗船して突然あちこちに現れる小蒸気船が光景を活気付けるのに実に貢献した。しかし水は掻き回されその周囲の魚たちは追払われた。何匹かの鰻の様な魚と１匹の不意を衝かれた烏賊が我々の収穫の総てであった。しかし漁師たちの手腕を認識させるのには十分であった。彼らは獲物を何時も早くもかなりの深さで発見して電光の様な速さで網を使用して掬い捕ったからだ。

８月６日、下関から宮島へ

八重山への乗艦に際し有名な日本の内閣総理大臣伊藤博文伯爵[58]と知合う事になり同時に彼に対して私の心からの弔意を表した。彼は深刻な転落事故の結果病臥している令息

を見舞う為に昨夜[59]到着したのだ。伯爵の令息[60]は同様に私に対して差遣されていたのだ。しかしながら我々の方に向っている際に、舷門の階段から転落し体内に非常に重大な損傷を被ると言う不幸に際会したのだ。我々の医者もその患者を診察したのであるが快復の可能性はほんの少ししか無い旨を打明けた。

総ての軍艦が発射して轟き渡る礼砲の下に我々は下関に別れを告げた。その間に我々の長船体の巡洋艦はぐるりと旋回しとても称賛されている内海に乗入れる為に東に向い方向転換した。日本の内海セトノウチウミ（瀬戸内海）は幾つかの海峡の間にある海で南は九州島と四国島、北は、しかし、主島である本土に囲まれ、ファン・デア・カペレン海峡、豊後海峡とリンショッテン海峡[61]で大洋と連結されている。潮の干満は内海に於いても大洋に於けるのと同様に生ずるがこの内海の深さは浅く20尋[62]に達しない場合がしばしばある。西は下関から東は大阪にまで亘って内海は特に中部では火山を起源とする島々で覆われている。その数は日本の資料に依れば何千にものぼると言われる。我々が下関の狭隘な海峡を離れてしまうと直ぐに九州島と本土島の岸が我々から離れていった。両島はここで急速に後方に退いていってこの内海の周防の国によって名付けられている部分[63]に向けて大きな弧で包み込んだ。

今日という日は我々全員を魅了して最善の印象を与えた。穏やかに青い空は雲も無く我々に微笑んだからだ。そして新鮮な微風が快適な涼しさを齎した。平穏な海は無数の船で活気付いていた。それらの船は奇妙な形に建造されており風変わりな帆を備えていて漁撈の目的で出帆して来ているのだ。漁労は日本国民の食料補給に重要な役割を演じている。魚類が主な肉類の栄養源であるからだ。日本で通用する規則に従って汽船は周りを走り回る小舟たちを回避しなかった。反対に小舟たちが汽船に自由な航行を可能とさせる様にと義務付けられているのだ。この事はある種の不注意を伴って現れたので頻繁に汽笛を鳴らしたのに懸念すべき程の近くに個々の戒克（ジャンク）[64]と遭遇する事が稀ではなかった。そして遂にその１隻に激突して船縁にどしんめりめりと言う音を立てながら更に前進したのである。事故を起こしたのであるが舵と帆柱は難を免れたのである。我々の艦長には衝突の認識は無く彼は何事も無かったように微笑みながら更に航行し続けたのであった。

３時間ほど後に我々は進路を変えて島々で形成された真の迷路の中を踏み入る為にその航路に北東の舵を切った。島々がこの様に混沌としている中を航行するのは本当に魅力的であった。旅行記に記された内海の自然美の描写は誇張されたものではないと感激して自分自身の意見で確認する事が出来たのだ。部分的には禿山ではあったけれども最高に有効な背景を形成しているそのどっしりとした山々で比較的に大きい島々は堂々とした印象を与えた。とても素晴らしい形を示す比較的に小さい島々は少なからず海に突き出している巨大な岩塊だけからなっている。他の島々は丘陵や尖った円錐上の山で覆われている。殆ど総ての比較的大きな島々には人が住んでいる。岸に沿って村から村へ漁村から非漁村へと列なっている。住民が農耕か漁撈に従事しているのが至る所で露呈する。丘陵の斜面に

は良く耕された畑が上方へ延びている。余り波打っていない海の表面には小舟の大群が踊っている。又、大胆に飛翔する想像力はその地方の景色を詩にするための労苦を持っても良いのであろう。ここで目前に展開する光景は多様性や波乱万丈性や感銘の素晴らしさや魅力の内密性が優越しているのである。

我々への心遣いには十分に注意が払われていたのに八重山の艦長は12センチ・アームストロング砲の操砲訓練をさせた。長く続き終りが無いように思える日本語の号令であったにも拘らず操砲訓練は全く正確で敏捷に進展した。艦上の軍楽隊は時々何曲かを演奏した。それらはお決まりのテル[65]の序曲やミニヨン[66]からのメドレーや様々な故国の舞踏曲の旋律であった。私が今までに見たり聴いたりした事について日本人に示す事が準備出来ている認識に於いては私が既に我々に準備された甘美な音楽を楽しんだと言う事実を私は黙ってはおれない。演奏された個々の曲については当地で通常である解釈によってでは正しくは認識できない。プログラムも信頼性については余り要求できない。例えば歌劇のカルメン[67]を我々のワルツ王シュトラウス[68]の作品として記載していたからである。

我々が再び進路を変えて北方に舵を切った時に周防の国の山の多い海岸が僅か数マイル後方に位置していた。この海岸とその後には安芸の国の海岸に沿って航行し遠くに本日の我々の旅行目的地である島が見える所まで来た。我々が更に非常に狭い海峡を数隻の漁船と危険すれすれではあったが事故なしで始めから終りまで通り抜けた後で我々は宮島湾に入港した。そこには２隻の日本の軍艦巡洋艦千代田と巡洋艦天龍がいて八重山の到着を礼砲発射で歓迎した。私には快適ではない予期せぬ出来事ではあったが既に遠方から陸地にも船上にも白い制服を着て見分けの付く御節介な警察官たちの姿に気付いた。

宮島は神社の島であるが群島の他の島々を前にして華麗で密集した森に覆われて457mまで上昇していく高地に引立てられた様に傑出している。この島の陸地は神聖でありその故に人間の手は木々に触れてはならないし野獣もここでは人間に邪魔されない存在である事を楽しんでいる。それで完全に飼い馴らされている鹿は歩行者の中の真ん中であちこちと行き来して側を通る人たちの手から餌を食べている。この島を際立たせる宗教的な荘厳さは無視されここは夏季に多数が訪問する行楽の場所となっている。魅力的で海に対して開放されている谷間には多数の快適な小道が通っていて熱過ぎる気温になる事は絶えず無く生気を取戻させる海水浴場と淡水浴場は同じくらい多く人を惹き付ける要因であるからだ。この島には約3,000人の人が住んでいる。神官や飲食業者や漁師や彫刻師などである。彼らの住居は湾に沿って優美な曲線を為し華麗な針葉樹が我々を歓迎している緑の丘の麓に位置した。更に対岸の安芸の国の海岸地帯に対しての興味を惹きつける様な対比があった。というのは鋭く下りて来る山の斜面は禿山で光に染まって殆ど真っ白にかすかに光っている岩盤と岩塊が暴露されている。それ故に山々は雪で覆われている様に見えるのだ。

宮島に於いても私は華々しい登場を、つまり出来ればそれから開放されていたい様な初登場式を挙行しなければならなかった。しかしながらその様な儀式は不可避であった。日

本人たちは明らかに機会があれば何時でも大々的な祝典と最高の華美を展開する事に決定的に重要な価値を置いていたからである。上陸桟橋には大勢の高位高官や名士たちが立っていた。彼らは私が近くに来ると私に紹介され深く御辞儀をした。彼らの所に警察官の隊列が並んでいた。その列の後には好奇心満々に外国の皇子を見ようとして大勢の民衆が群がっていた。その皇子は故国と日本の随員に随従されて萌黄色の軍服を着用した近衛騎兵[13]と剣を持った皇宮警部[13a]の間を悠々と進んだ。だが私は敢えて予定表を僅かながらも逸脱した。我々の住居までの行程がかなり長く伸びているのと高温の中をそしてこの小道に薔薇ではなくて高く重ねた繊細な砂が撒かれている状況の下で厳粛な行進の速度で進む事は全く快適でなさそうだと判断した時に私は一種の駈足を行なったからだ。その事で私は直ぐに目的地に到着したのであるが随行員に対しては上天気の下では些かの息切れを齎したのである。

我々に対して日本の畳で整えられた宿舎は既に今日まで我々を賛嘆させていたのであったが当地で我々に準備されていた宿舎[69]は風景の見事さと建築の独創性や些細な事柄までが魅力的な居住空間であって遥かに凌駕していた。道は我々を狭隘な森林渓谷にまで導いた。そこでは何百年も経った木々が快適な日陰を齎した。渓谷の底には水晶の様に透明な小川がさらさらと流れていて元気に泳ぎ回る金色や他の色の魚によって活気づいている。木々の間を岩が上方に聳え立っている。そこに不規則的の様に配分された趣味の気紛れにその成立ちを感謝されるべきこよい無く可愛いい小さな家々がある。その各々が我々の１人１人に指定されている。その道筋の何箇所かにさらさらとを立てて流れる小川が小さな池で堰止められている。その真ん中の杭の所にヴェランダの付いた囲いが無い池亭が建っていた。この池亭の中の小川のざわめきの所で畳と膨らんだ枕が休息とまどろみに招待する。総ての優雅な建物が優雅な道や階段や小橋や小川によって連関されている。岩塊の間にあちこちから泉が湧き出ており噴水がしゅうしゅうごうごうと音を立てている。そこから噴き出る水はへこんだ形に掘り抜かれた石に戻り落ちる。それらの石は絵画の様に水生植物と蔦科の植物に縁取られ絡みつかれている。至る所に礼拝堂や聖柱に似て我々の国では田舎道に立っている小さな石製の苔が生えている神殿風の建造物[70]が存在している。石をくり貫いた窪みに夜になれば光を容れてこの様なやり方で照明用途に役立つ様に定められているのだ。我々をここで包み込んでいる素晴らしさは真正の芸術家によって生み出されたのだ。彼らの生き生きとした想像力は自然美の鋭敏な受容と心情のこもった詩情とで一対にされている。牧歌的な森林地区に対する我々の驚嘆を表す言葉を与えて魅惑の村を詳細に吟味する為に我々は至るところを急いで回ったのである。

個々の家々はレイアウトとデザインに於いて変化に富んだ多様性を示したのであったので日本の建築家の豊かな造形能力について感嘆する事は尽きなかった。しかしながら個々の小さな傑作は愛らしさと言う統一的な特性を身に付けている。また当地では建築材料として木材や特に竹材や畳、紙だけを使用して来たのは勿論職人たちがその卓越した手法で

稀有な技能を最も簡単な手段で快適な効果を目前に創り出すはっきりと示してきたからだ。居住空間の内装自体が美の法則に対応して絵画的である。同種族の支那人[71]の装飾芸術が色鮮やかで派手に時としてけばけばしく動く画法で特徴付けられているのに対し日本人の装飾芸術は色の鮮やかさを無視すれば芸術的に守られた節度や完璧な調和や寛ぎを齎す居心地の良さやそれに適合した快適さで人生を可能な限り快適に構成する繊細な理解力によって傑出しているのだ。日本の本性の根本的特質である生きる喜びに溢れた快活さや魅力ある官能性や顕著な美感覚は国民生活の総ての領域で顕著となり素敵な気質で緊密に織込まれた相互関係が日本の地に足を踏み入れた外国人をして直ちに風土と人情に共感を持たせる事になるのだ。

我々に同行した高位高官や名士たちに別れを告げて私の住居を確保してしまった後で我々の住居地の近所を歩き回った。

宮島は有名な神社であって重要な巡礼地であり南日本では一種のマリアツェル[72]である。我々の恩寵教会近くにある様に当地でも神社の区域には無数の商店や露店がある。そこで他の品々に加えてこの聖なる島の思い出の品を買うのだ。これらの物品は大抵はこの島の光景や神社や鹿の描写であり巧妙に彫刻されたり画かれたりしており殆ど馬鹿馬鹿しいほど安いとも言うべき値段で購入可能なのである。その様に安いのはこの島はまだ大勢の観光客の道筋から離れており住民がまだ英国や米国の旅行者に甘やかされていないと言う事で説明される事情から来るのだ。ここの屋台で車一台分が一杯になるほど大変な量の品々を買求めた。それらの品々は小机や花瓶や奇妙に曲がった木々の様々な製品や子供の玩具そして他の100にものぼるほどの物であった。

ところで、政府は当地に於いても私の収集の拡大を可能な限り容易にさせる様に努力済であった。学校の建物に日本の芸術産業の生産物の形式にかなった展示が既に準備されていた。それらの展示品は本質的には露店で売りに出されていた品々であったが、公的な関与に対応して商店で要求される値段の３倍を要した。それで私は日本の古い甲冑１領とそれに属した獰猛な口髭を付けた怖い顔の面を買うのに留めた。

私は更に行って大きな木造の神殿の様な建物にまで上っていく険しい階段にまで到着した。その建物は丘の上にあって太閤さま[73]によってその場所に建造された。太閤さまは、この国の総大将兼摂政であったのであり、厩舎番[74]から始まる経歴を有していて、1591年にはこの建物の中で小西行長と加藤清正の両将軍に指揮された日本軍の朝鮮征伐[75]への出陣に対する命令を発したのである。太閤さまが大規模な祝宴をも張ったであろうこの建物は壁に掛けられた無数の奉納画[76]によって装飾されている。その建物から遠くない所に建築されている搭の木造の芸術作品は他の物と同様に遠い昔の畏敬すべき痕跡を示している。これらの建物の上手から数歩の所であって忠魂碑から遠くない所で愛すべき宮島を素晴らしく見張らせる決定的な地点で私は喜んで楽しんだのだ。

池亭の１つで楽団２つの演奏を聴きながら我々は晩餐を取った。この我々には馴染がな

い食堂ではことのほか快適な気温が支配した。我々の故国に於いても夏の季節には似た様に建造されて似たように状況の空間が同じ目的に使用されるとしたら望ましいしいのであろうが。もし宮島での快適なる晩餐を少し邪魔をした蚋(ブヨ)がその事を許せばではあるが。食事には例えば非常に活発で陽気な気性を享け楽しんでいる広島の師団長[77]と軍港都市呉から来た提督[78]が出席した。私はこの２人と活発な会話を楽しんだ。提督の話題は、日本人がその海軍の建設を綿密に配慮していると言う、私の信念を強化した。呉から遠からず位置する江田島に設置されている海軍兵学校の優秀な成果によって少なからず説明されうる状況によってであるが。

この島の有名な神道の聖地である神殿を夜になってから訪問した。神道と仏教は両方とも日本の住民が信仰している異教徒の宗教制度である。そして仏教は現在７つの大宗派に分裂して極端な偶像崇拝が齎されているが本来の国民宗教である。社会の上層部の人々は現在では大抵は宗教に無関心か無神論に陥っている。この２つの所謂宗教の他にも儒教が受容されている。儒教は実際にはそんなに深く浸透している訳ではないが教養ある階層に特に旧時代の侍たちには大きな影響を及ぼしたのである。

神道は現世の生活の至福を目的としており死者の霊がこの目的地に到達する事に助力する事を想定している。それ故に信者がそれらの霊を必要とする際には拍手を打ったり音を立てたりして呼ぶのである。独特であるのは神道または神の教えに対しては何百万にものぼると言われる神々の群[79]の他に有名な人々に神としての崇拝が行なわれる事である。それらの神々の円舞は太陽の女神である天照大神によって統率されているのだ。この女神の子孫であると言われる神武天皇（紀元前660年―585年）日本帝国の創設者であり皇室の先祖である。それでその時々の日本国天皇は天国への導き手として従って神として崇拝されるのである。神道にとっては本来的で教条的で倫理的な原理は馴染みが無いのであるが職業教育によって伝えられている儀式と発展してきた典礼は固有のものなのだ。仏教と同様に神道も本来的な純粋さを維持する事ができずにむしろ反対に種々の関連で仏教の影響を受けたのである。

興味深いのは1868（明治元）年に新しい時代が始まった後に政府によって神道を優先して仏教を排除しようと言う試み[80]が為された事である。この様な努力は天皇或いは他の称号ではミカドが宗教に於いて持つ当然の利害関係から説明が付く。神道は天皇を帝国の創設者にまた天国に関係付けて考えそして鮮やかな改革運動を通して再興された天皇の権力確立に貢献する事に非常に適して現れなければならなかったからだ。ところで1876（明治９）年には信教の自由が宣言された。そしてこの基本方針によってキリスト教も利益を被る事が出来たのだ。少なくとも既にその数年前からローマ・カトリックの司教座が東京、長崎、京都、及び仙台に設立されていたのだが。

伝えられる所では既に６世紀か７世紀に建設され３つの神を祀るこの島の神殿は清盛[81]によって12世紀には西日本の建造物としてこの神殿を有名にしたその姿を授けられたの

だ。神主たちつまり神道の聖職者たちが我々に敬意を示して薄暗くはあったが点灯してくれたこの神殿は神道の聖地としてここの杭のところに立って海の中に建築されている高い絞首台の様な形の門すなわち鳥居によって特長付けられているのである。この神殿は御神体を収容する部屋と連絡廊下の縺れ合いを囲んでいた。

我々が本来の神殿の空間へ立入る事は拒絶されたが蜀台とに絵の他に目立ったものは知覚出来なかったものの少なくとも一瞥を投げる事はできた。神殿の本殿の真ん中に台座の様なものが見えた。それは大祭日の荘重な行進の為に定められていて金属製品で真の芸術作品である２頭の青銅製の龍が両側面に立っていた。独特に形作られた高さのある青銅製の花瓶には私は既に神殿の入口で気付いていた。

白い絹の衣服を身に付けて司教の帽子を思い出させる独特の冠を着用した神官たちは我々に同行し２つの部屋で礼拝儀式の際に使用される総ての物品と道具類そして他の沢山の品々の中には我々の淑女たちの妬みを呼起こすのに相応しい様な豪華な素材更には怖い顔をした面や様々な剣を提示した。剣の中幾つかは不恰好な４，５mの長さが提示されたが明らかに何らかの儀式の際に見世物として利用されるだけであろう。

宮島の神殿はその華麗なる内装に於いてはっきりと広範囲に及ぶ仏教の影響の結果を示している。純粋の神道の神殿は簡素さによって取分け金属製品や漆器装飾の欠如で傑出しているからである。またその表象は神の輝きの象徴としての円形の銅鏡や御幣つまり神の霊が下りて来て留まると考えられている木箸[82]に固定された紙や神の純粋性と権力の表徴として宝玉か水晶球に限られているのである。

注目すべきは神殿の廊下に掛けられている多数の奉納画である。それらの一部は卓越した芸術的価値を有していて遠い昔に描かれたのである。そのうちの幾らかは有名な画家の手になるのである。我々は当地で考えられる限り多種多様な描写に遭遇したのである。というのは時々は怖い顔をした様々な善かったり悪かったりする神々や霊たち猿や鹿や、他の動物や、そして、人生の彩りに富んだ光景が一部は画かれ一部は彫刻され一部は挿入された作品に展示されているからである。

夜は既にかなり深く更けていたが喫煙し雑談し、また、シャンパンをちびちびと飲みながら周囲の自然を楽しむ為に我々は着物を着て池亭の下にいる事にした。この自然の魅力は我々全員に宮島での旅程どおりの滞在が短か過ぎると大声で遺憾の叫びをあげる様にさせた。

最後に我々は池亭の廊下から流れの中に飛び込んで赤い提灯の光の下でその中を嬉々として跳ね回って小川の波で冷水浴をしたのだ。

８月７日、宮島から京都へ

私は日の出とともに間髪を入れず神道の社殿に急行した。社殿を陽光の下でも観察しもう一度奉納絵画を堪能する為である。それから我々は《八重山》に再度乗艦し、残留する２

隻の軍艦からの礼砲と登檣礼[7]で見送られて、これまでの旅程で最も素晴らしかった場所の一つとして思い出に固く留まる島である宮島を離れたのだ。

好都合な事に天気は晴朗であった。素晴らしい日であった。そして我々は内海が島々の森羅万象でもって提供する景色を感銘するのに没頭する事が出来た。今日もあらゆる種類の無数の漁船が海面を覆っていたが我々が昨日に遭遇した船舶よりは注意深い様に見えた。それらの漁船は、《八重山》の汽笛のけたたましい音を聞くや否や遠距離で既に《八重山》を回避したからだ。安芸の国の海岸と我々がその間を航行した島々は我々の航海の最初の２時間の間は前日我々が通過した本土や島々と全く同じ特色を示した。緑の山々と独特で自然の岩だらけの地層がここでも景色の基調を為している。しかしながら徐々に丘陵と斜面が他の特徴を形成する事となる。それらの丘陵と斜面はますます不毛となり植生は後退し黄色の岩石に代替されるからだ。その黄色の岩石の遠方まで光る輝きは景観に独特の色調を与えている。それは、あたかも山と丘の内奥が白日に曝されているみたいであり恐らくは度を越えた木材の伐採が齎す悲劇的帰結であって非生産的になってしまった土壌に植林する事で再び豊穣にしようという試みるにはその不都合の認識が遅すぎたのだ。我々は甲板からまだ若い苗木の整然とした輪郭を知悉する事が出来たがこの苗木は未だ成功したとは言えず欠陥除去の正に第一歩でしかないのだ。貴重な建築材料を提供する石灰岩の断面が様々の方向に見える。

《八重山》は我々が備後の国の三原に上陸するまでにいくつもの狭隘なる海峡を通り抜けた。三原には２隻の日本の大型軍艦[83]が停泊していたがそこで《八重山》の士官達に別れを遂げた後で鉄道停車場に向うために退艦した。

三原は瀬戸内海の北岸に沿って将来は下関まで延長され連絡蒸気船によって門司から熊本の鉄道路線に接続される予定であった山陽鉄道の当時の終点であった。鉄道路線に沿って見えた景色は最初の間は我々が既に艦上から知悉した基本的特質を有していたがあまり嬉しくない木材荒廃の痕跡に対して海と絵画的な入江がしばしば展開される眺めが償いをする。一連の製塩施設が海岸に沿って認められる。平地の大部分が米の栽培に充てられて居る。ここでも既に草木の乏しい緩傾斜地には樹木の植付けが始められていて緑の兆候で覆われている。米の栽培は旱魃によって非常に苦しめられている。旱魃が大きな河床さえをも干上がらせてしまうのではないかという悲痛な叫びが全国に繰返し響いている。徐々にこの地域がより感じの良い形式を受けてくる。丘陵は森で覆われている。杉，松、竹が我々を待受けている、そして遂に我々に既に愛しくなっている真の日本の特徴を持った景色に我々は再び急ぐのだ。

豊かな商業港湾都市の尾道でも又鉄道沿いの他の村落でも鉄路は家並を貫通してとは言えないまでも街の真ん中を延びている。家並は鉄道に非常に接近しているのでそれら住居の住民達と簡単に話が出来そうである。彼等は轟音を立てて通過する列車に煩わせる事なく日々の生業に従事している。楽しげに解せない動きをしている家族の光景を勿論の事な

がら私は窓辺に立って観察出来た。尾道から遠くない所に華麗なる遠景で日本全国に有名な千光寺と呼ばれる寺院があった。この寺院を訪問する楽しみを断念せざるを得ないのが残念だ。

備後の国の中心地にある福山駅に到達する前に丘の上に仏教寺院風に建設された以前の大名であった現在の阿部伯爵の城が見えた。その城は外観から判断すれば非常に良好な維持状態を享受している。似たような城が岡山にあり以前の大名で現在の池田子爵に再び返却された。当初策定された日程に依れば我々は岡山に滞在し宿泊する事となっていたのだが私は京都により長く滞在出来る様に同地まで中断なしに行く方を優先させた。それにも拘らず全市は御祝いの旗の装飾で絢爛豪華であった。何千人もの人々が駅の近くにひしめきあった。その人々の中には多数の高位高官の人々や代表者達が集合していた。岡山市長が私に長い挨拶をして市街や郊外の場所や生活と人々の多種多様な光景を示す素晴らしい写真集を私に贈呈した。

ところで我々が停車した他の総ての駅に於いても地方官庁の人々や学校の児童生徒達や消防組[84]員達が、衛戍地に於いては将校団も、挨拶に現れたので私が栄誉深き歓迎に直面する際には自国を遍歴する君主であるが如く見なされ得たであろう。願いによって礼式と歓待を受ける義務を出来る限り軽減する様にと言う願いを宮廷と政府に希望した事は既に言及した通りであるが、以前から横浜までの行程を御忍びの旅に変更するか歓迎式典を絶対に必要と判断されたものの程度に制限するかと言う要望をして置いた。なのに現在のところは国中で大仰な儀式に私を連れ回す事に重点が置かれている。

疲労が遂にその権利を行使し始めたときに私は休息に入り直ぐに眠りに沈んだ。それで夜の11時に花火を使用した煌(キラ)めく様な神戸での歓迎式典を逸してしまった。その歓迎式典には当地に投錨している艦船の士官達も顔を出していたのだが。

８月８日、京都にて

神戸から東京に向っている東海道線は海岸沿いに大阪まで延びている。そこから内陸の北西方向に京都に向かって向きを変える。数多(アマタ)の歓迎式典が惹起したかなり遅れて深夜１時に京都に到着した。ここで私は御料馬車に乗り随員が乗車する人力車の長い車列が従って御所つまり皇居に向った。直線的で直角に交わる通りを長時間走行した後に到達した。真夜中にも拘らず道路に沿って群集が密集して集合していた。彼らは道路の両側に我が国の色の光[85]を放っている提灯の下で人垣を形成していた。

皇居は庭園と屋根がついた高い塀で囲まれて居り貧相な印象を与える。檜(ヒノキ)で建造され黒ずんだ壁と檜皮葺(ヒワダブキ)で険しく傾斜する屋根がその様な印象を良くする訳ではない。我々に割当てられた家屋[86]の部屋部屋は本来の日本様式で簡素ではあったが趣味良く飾付けられている。我々はここでも引戸と明るい畳を見つけた。壁には金地の上に見事に描かれた具象的な表現を見る事が出来る。廊下が建物を囲んでおり直接に庭園に接している。その庭に

は無数の警察官達が推定されうるあらゆる危険から私を守ってくれている。

我々が安息に入ったのが遅い時間だと言う事を顧慮して私は皇居を早速朝早く出発する事で随員達から抜け出して人に気付かれないで京都の名所を見物出来ると信じたが私の計算間違いであった。と言うのは私がこの都市を散策して半時間も経たぬ間に日本側随員の紳士諸君が既に徒歩で付いて来たからだ。遅延した事に私が気を悪くしているかどうかを少なからず気に掛けながら。

私が最初に訪問したのはゴシック様式の明るい感じの神殿であり日本人の建築技師によって建てられたカトリック教会[87]であった。近くに定住し天の恵みを齎す活動が既に実を結んでいる修道女達に劣らぬ熱意を持ってフランス人の神父たちがこの教会を管理している。

京都は298,500人に達する住民を有し、帝国の基盤部分を形成する日本の五つの基幹国（五畿内）の一つである山城の国の肥沃な平地の鴨川と桂川の間に建設されたのであって、天皇の総ての居城がその地に所在したのである。鴨川の右岸に都市の大部分があり左岸には森林で覆われた東山高地の所でそそり立つ小部分があり少し離れて北側と西側も森林で覆われた山岳で縁取られて京都はその地域的な景観と規則正しい都市計画また非常に幅が広いとはいえぬ街路の清潔さで引立っているのである。この都市は繁栄する工芸産業すなわち絹糸産業や金属産業や陶磁器産業の中心地として昔から高い名声を博して来た。しかしながら京都は古き日本の1,000年を越える歴史の伝統的な舞台として尊重され有名なのである。新しい歴史の創造神は東京に居を定めてしまったのではあるが。794（延暦13）年にこの国の最も優れた君主の１人である桓武天皇が宇太村に居城を移した。その村のこの場所に平安京つまり平和の城と名付けた宮殿を建造し、こうしてその名前が支那語で《首都》を意味している京都の街の基礎を築いたのだ。1868（明治元）年の歳は他の多くの事柄と同様に京都の地位にも関しても冷酷な足取で通過して行った。大きな歴史的過去と根を張った伝統とに縁を切る事が肝要であったのだ。新しい考え方に対しては古き思い出の場所より好都合な培養地が与えられなければならなかった。それゆえに天皇の居城が東京に移されたのだ。そして、その事で京都の優位性が破壊されたのだ。前者の東京は日本の未来を後者の京都は日本の過去を意味するのだ。京都は政治的のみならず物質的にも東京に対する優位を喪失してしまっているにも拘らず保守的な日本人にとって今なお精神的中心であり日本の歴史と学問と文化の中枢である。そして依然として京都は栄光を保っている。京都は寺院の街である。市域と郊外に3,000の寺院が存在しているであろう。カトリック教徒に対するローマ、ロシア人に対するモスクワ[88]、モハメッド教徒に対するメッカ、仏教徒に対するキャンディ[89]が日本人に対する京都である。この事は仏教や神道に結びついているのだ。

3,000の寺院の総てを見物するのは良い事であるが多すぎるので傑出した寺院のみに限定した。市街の東部に位置する丘の上に要塞の様にして建っている浄土宗の本山知恩院か

ら始めた。

僧侶達が妻帯禁止を厳格に監視し肉食を禁じ霊魂の救われるかどうかは主として敬虔なしきたりを厳守するかどうかによると教えている浄土宗は1173年に法然上人によって築かれ徳川将軍の下で栄えたのであった。桜の木々が両側に生えている街路は寺院の正門に通じる。その門は２階建ての背の高い建物で重厚な木材の作品で出来ており優雅な建築学的形態と言うよりは独特の形態を提示している。急坂に取付けられ色の濃い杉の木々が両側に植えられている石段は大きな前庭に通じその奥には本堂と呼ばれる寺院の本館の魅惑的な林苑がある。前庭には水の湧き出る沢山の立派な青銅製の金属容器が立っている。その水はきっと信者が寺院に踏み入る前に手を洗うに用いられるのであろう。使用された痕跡を残す若干の青い花模様の手拭もここに掛けられており明らかにこの目的に利用されている。本館は色がくすんで堂々とした列柱のある会堂であるが同様に一般的な材料である木材で建設されているがそれ故に繰返し炎の餌食となり最後は1633年に現在のかたちに再建がされたのだ。

我々は靴を脱がねばならなかった。そして誰もが入れる会堂に足を踏み入れた。そこでは多くの僧侶が念仏を唱え大鑿(ダイキン)[90]が打たれていた。しかしながら好奇心の方が御祈りの気持よりも強かったと見えて我々の方を見たので大鑿を打つ調子が狂ってしまった。三宮[91]は若いときに自分自身が寺院の僧侶であったので以前の同業者達をこちらに呼んでこの寺院の総ての部屋に案内せよと命じた。頭をつるつるに剃って風変わりな網状の帽子を被った僧侶たちは一種のストーラ[92]を首の周りに巻きつけて着用し衣の絢爛さによって格差を示していた。嘗て僧侶達は襤褸(ボロ)に包れて颯爽と歩いていた事を思い起す為の厳重な規則によれば、これらの衣を本来は端切れを継ぎ合せて縫製すべきであったのにも拘らずである。偶像崇拝者達[93]は指示された祈祷と式典を行なうのみならず御守りの活発な販売も行ない御布施の額に応じて極楽への通行証を発行する。

この類の建造物の中では京都最大の物の一つである本堂自体の中に四つの柱で区切られ台状の祭壇の上に宗祖の像を収容する華麗に金箔を施された厨子が立っている。この像は規則に依れば教義創設記念祭の際に年に１回だけ世俗的な目に曝されるのであるにも拘らず私の栄誉の為に例外が為され聖物の提示が行なわれた。その際に１人の僧侶が何度も跪拝を行なって厨子を開帳した。その像は微笑した顔付きの小柄で肥満した男を表示している。その男は快適そうに座布団の上で休息しており外貌の総てが厳格な宗教改革者というよりは寧ろ人柄が良い遊蕩児を思い起させる。聖物を納めた祭壇は素晴らしい漆器細工と青銅細工によって傑出している。漆器と青銅の細工は調和の取れた融合をしており稀にしか見られないような芸術的な作用を引起している。まわりを囲んでいる木柱は潤沢に金箔が張られその柱頭と欄間(ランマ)と格間(ゴウマ)[94]は想像上の動物や他の総ての象徴を表現する精巧な木彫芸術で装飾されている。

前面の柱の前に殆ど寺院の高さの半分にまで届くほどで金属製の蓮の花を納めた青銅

製の巨大な花瓶が聳えている。多くの青銅製の燭台や香炉や経卓[95]が非常に貴重な装飾となっており大きさの割合に関して考え得るだけのあらゆる変化を示している。というのは数メートルの高さの蜀台やその他の金属製品の側に小さな炎をも殆ど納める事が出来ない程の小型燭台などの極小の寸法に保たれている物体が見られるからだ。しかし我々に絶えず見えるものは最も上品な形をしておりこれらの傑作を創り出した芸術家達の高尚で神経が細やかな嗜好を証明する。

第一祭壇の横に仏様の祭壇がある。奇妙であるがこの事はこの寺院が正に宗祖に献納されたと言う事情に起因している。多くの金箔貼厨子の中の小さな台座の上にこの寺院の為の敬虔なる喜捨や寄付の追憶に結びついた様々な人々を祈念するために小さな板[96]が立っていた。かなりの数であるこれらの小さな板はその配列からして全く墓地の雛型の様な印象を与える。

本堂には集会場とか仏経典の全部を収集し開花した蓮の花の上や下に座していて神聖なる現象を為した神を表象する豊かに金箔を貼った像を収める多くの仏壇を所蔵している図書館などのあらゆる種類で様々な用途の多くの建造物が隣接している。仏壇の周辺の近くには信者達の頻繁な訪問の痕跡が示されており金箔はしばしば仏像の個々の場所で非常に剥げてしまっている。この事は神の力によって身体の痛みを和らげたり疾患を除去したりする事を懇願する敬虔な巡礼者達が自分達の身体の障害がある場所を仏像の対応する部分を擦る事によって養生している事から説明される。つまり非常に滑稽な事に他には全く何も望まない様な宗教的信念の活動の一形態である。

更に本堂に並んでいる建物は宮殿であって1623年から1651年まで統治し抜群の行動力が際立っている将軍家光によって建造された。この宮殿は部屋の数が多くて全くの迷宮となっており以前の時代には一部では天皇の為に一部では大僧正となった親王の職務の為に指定されていたのであるが現在では僧侶達の居住目的に使用されていたり全く使用されていなかったりである。これらの部屋部屋は襖に描かれた絵画によって見事に現れている。我々はここで古くて非常に著名な巨匠達の有名な作品を見付けた。それらの絵画はあらゆる動物と植物や人間生活の光景を描写によって不滅のものとなっている。個々の部屋では松竹梅の木や菊や柳や冬景色等々の感嘆に値する様な描写が示されている。特別な評判を享受しているのはどんな立脚点を選んでいたとしても観察者に対して頭を向ける様に見える一匹の猫の描写であり更に描かれた木が樹脂を出してしまったのに雀が完璧に飛び立っしまったと言う逸話の特徴を的確に描き出して実物そっくりな松と雀の描写である。これらの芸術作品では人がその上を歩くと鳥の声を思い起させる様に軋ませるべく廊下の床[97]を構成する板を継ぎ合せると言う遊びが軽蔑される事はなかったのだ。

本堂前方の回廊の下には木組みの中に黄色に変色してぼろぼろになった一本の雨傘が差し込まれている。その傘は遥か昔に稲荷の神が化身した男の子の手からそこまで飛ばされたと言う事で火災に対する防御手段として効き目があると言う事だ。しかしながら火災に

よって寺院の建物が何度も破壊された事が証明する様にこの奇跡の傘の属性は否定的にしか確認されなかったのだ。信者達は未来を垣間見る為にこの傘を用いる。心に願いを有していて未来の情報を得たい者は小さな粘土の玉か購入した紙の玉をこの傘に投げる。投げつけた玉がその傘にくっ付いていればこの事は独特な様式で相談された神様の縁起の良い御告げであって良い兆候だとされるのだ。木組みに貼り付けられてその場所を汚している購入された運命の問合せ[98]で判断をすることによって願いを育み好奇心に溢れる信者が非常に沢山いる様だ。

稲荷は収穫と米の神であって従者として日本のライネッケ[99]狐を選んだ。狐は利口な事から普通は神社の見張に採用されておりその任務から様々の材料で製作されて寺院の入口に自分の場所を有している。狐の側で鶴と淡水亀が特別の栄誉に浴している。両者は幸運の象徴としてとりわけ後者は長寿と平穏な老年の象徴でもあって七つの至福の一つである。したがって青銅や陶器や漆器でのこの動物の描写や長命で幸福な人生を望んでいる事が表現する様な贈答品として用いる事が非常に好まれている。

木々の間の小さな丘に1618年に完成した搭[100]が立っている。そこには３メートル以上の高さと殆ど高さと同じ直径を有する大きな鐘が基盤の上の梁にぶら下っている。この鐘は1633年に鋳造され音色の清澄度を向上させる為に多量の金が材料に添加されたのだ。搭の外側に固定されている木の幹は破城槌に似た撞木（シュモク）として役立っている。

我々は人力車で数多の清潔で特有の感じの良い印象を与える街路を走行し祇園社（ギオンヤシロ）[101]の社殿に向った。そこは丁度今見物した所から遠くはなかった。神道の祭式を行なっているので既に我々が宮島で見た馴染みの門[102]を認めた。一般的には外国人にとっては仏教寺院に於いての方が神道の神社に於けるよりも理解を開始するのが容易であるが本日は神社に於いても理解の困難さがなかった。社殿の前庭には多くの長い詞書で覆われた奉納の板[71]と提灯がとりつけられている。内殿では一角獣と虎の恐ろしい顔をした像に守られた象徴として鏡と御幣を我々に見せてもらった。祭壇の前には清潔な机の上に食物と飲物の供物、即ち、米や魚や酒が並んでいた。それらは信者から大量に奉納され神官によって喜んで迎えられる献上品として受取られる。

仏教寺院の清水寺に通じて列なった小道には瀬戸物とりわけあらゆる種類の人形を販売しているの商店街があったのであるが険しい上り坂になっているので我々の人力車夫には強烈な負担となった。この寺院には特別の人気を享受している慈悲の女神である観音が祀られている。観音は人間の祈りを聞き入れてあらゆる苦難から救い出す能力があり、このような無限の力をはっきりと見せる為にいくつもの顔と40本の腕と1,000の手で具現されている。この聖地の創設史は伝説的なものであって非常に古い時期に失われているが、いずれにせよこの寺院は京都最古の建造物に属していると言えるだろう。ここでも連続する険しい石段が上方に通じていて、その終りには２階建ての高さの門道が建てられていた。３階建に聳え立ち豊富な彫刻装飾が際立っていて他を圧倒する位置を占める搭が幾分より

高く立っていた。その近くには若干の小さな礼拝堂があった。柱廊を登って行くと訪問者は遂に本堂に到着する。その本堂は皮を剥がれただけで余り加工されてない柱によって不思議な作用を引起す。本来は余り快適とは言えない上り坂も多数の興味深い物ですっかり楽になる。それらの物、つまり、絵馬や巨大な寸法の青銅製の花瓶や芸術的に造形された龍の像が付いた泉は我々を絶えず停止させ観察させ感嘆させるきっかけとなるし他の諸々の物も注意を惹き付け歩みを止めさせる。本堂は両側に非常に多くの神々の像が並べられている厨子の中に1.5メートルの高さを越えるこれも観音と名付けられている千手の慈悲の女神の座像を有している。しかしながら厨子は33年毎のみ開帳され慈悲像の拝観が民衆に許されるのだ。自然の植物や造花や花瓶や燭台や香炉や供物皿の様々なものが乱雑に祭壇を装飾している。信者達は縒り合された紅白の綱で大鐘を動かして特別な切願を神様の耳に入れる事が出来るのだ。昼夜を問わずに助力と慈悲を懇願して得ようとする信心深き人々が訪れる常夜灯が寺院の中で燃えている。

寺院の前方の側に両翼に楽団席を有しダンスフロアの意味で“舞台”と呼ばれる木製の甲板が設置されており、明らかに大祝典の日々には特別な公演の披露が予定される。この甲板に隣接していて開け放されている会堂は絵馬で一杯でありそれらの絵馬の一部は女神が絵馬の奉納者の横に救いを与える為に立っている様な色々な出来事や事件の非常に興味深い描写を有している。様々な種類の象徴とりわけ寺院の聖なる馬のあらゆる可能性がある姿態と歩調を描写したものの横に人間の運命の様々な転変や権力者と庶民や巨人や怪獣との猛り狂った騎馬戦や闘争やそれらと並んで日常生活での災難を永遠に伝えている。これら総ては女神が1,000の手で助けてくれた事の記念である。

寺院の総ての施設と場所的な状況が観察者に与える珍しい印象は本堂のある丘が観音に献納された聖堂が装飾しているもう一つの丘と断崖によって分たれている事によって更に高められる。

この建築作品は杭の上に設置され丘の上に聳え立っており、回廊に立った訪問者に京都とその絵に描いたような周辺への華麗な眺めを提供する。無数の絵馬はこの寺に於いても女神の救いの力に対する証言をしている。その女神の木像は信者の救いを必要とする身体部分との頻繁なる接触によって既に完全に擦り切れて削り取られている。大型蒸気船に正に気缶の爆発が生じるがその船に乗っていた多くの人々が雲間を通して君臨する神によって不可避な沈没から救われる状況を多くの絵馬の下で一枚の絵が示している。

回廊の甲板から数年前までは狂信者達が時々自分に天の救いが具合よく一生涯保証されているのかどうかを確かめる為に開いた傘を両手に持って30メートルを越える深さの岩に飛び降りた。そうする事で大胆な跳躍者達が無傷に留まれば見極められた事になったが破壊された手足となれば神の保護が非常に手厳しく拒絶されたと言う事になったのだ。神様の判決を獲得するために危険な跳躍が頻繁に実行されたと言う事なのだ。自殺者達はこの寺院の面前で死ぬ為に同じ事を企てた事は当然である。遂に新しく組織された警察は様々

な跳躍の衝動に終りを齎す様に遂に甲板の周りに格子細工を廻らせる様にさせたのだ。

もう一つの小寺院は女神が子供部屋の中で効目を現す様にと奉納されているらしい。と言うのは非常に多くの絵馬や他の物がここにあって、それらは子供達が転落しないように格子で断固として防ぐと言う女神の保護を幼児達が満喫していることを指している。そして小さな粘土製の仏像が首の周りに掛ける人が子供に使用する様な赤い涎掛けを宛がわれている。食事の際に衣服が汚れるのを防ぐ為にである。

多くの見物をした後で今日の最後となったのは仏教で真宗あるいは一向宗と言われる宗派の寺院の見物である。その宗派は古い貴族の一族の後裔である親鸞が1213年に創始したのであって全国に10,000の末寺を有していると言われる。その教義の一種の合理主義と信者の清純な風習が際立っている。仏陀への信仰と高潔な思索と行動が信奉者の最も大切な義務を為しているが、妻帯禁止や祈祷や断食による贖罪の行やどの様な種類の苦行や修道院での生活等々を非難したのだ。注目すべき事はこの宗派の始祖が儀式に国語を導入し僧侶の身分を神道に於けるのと同様に世襲とした事だ。仏教の本来的な高潔さを再び構築する事で仏教信仰の改革に努力し欧州の学問を通しても構成員にも教義を伝えるようと努めているこの宗派は京都のみならず他の殆どの大都市に西本願寺と東本願寺と言う２つの寺院を有するのである。

西本願寺は1591年か1592年に[103]建造されたのであるが大きな規模と明らかにこの宗派特有の煌びやかな祭式の調度に繋がっている豊かな装飾が抜群である。如何に素晴らしい樹幹がここでは柱としてまた屋根の木組みに利用されている事か。如何に豪華であってしかも品良く保たれている装飾がここでは真実の芸術の享受を齎す事か。表玄関は菊の花と葉を示す華麗なる彫刻を示している。似た様な装飾が欄間を飾っており高く屋根の木組みまで届いていた。左腕だけを使用する事が出来たこの国で最も有名な木造の彫刻家の一人が[104]硬い木にあの傑作で命を吹き込んだのだ。寺院の庭の中に根を張って巨大な一本の木には寺院を大火事から護る力が付与されている。内部空間特に身廊[105]も多くの側面の礼拝堂も廊下から差込んで来て和らげられた光に照らされて豊富な金箔の中で輝いている。金箔は壁にも柱にも至る所に貼り付けられている。左側と右側に礼拝堂の様な部屋がありどちらも200年位の古さの掛物が所蔵されている。それらの掛物には濃紺の地に金の文字で書かれた神の御告げに加えこの宗派の際立った信奉者達の肖像画が描かれている。

この宗派の創始者の坐像を収容する凡そ60センチメートルの厨子は金箔と漆の花模様で覆われている。他方、正面の祭壇は金箔貼りの背景から際立っている花と鳥の透かし彫り細工で下地が分けられている。宗祖の像の前には今上天皇[106]の宸筆[107]で書かれた宗祖の名前が額縁の中で絢爛としている。

この寺院の属している他の建物の殆ど無数の多くの広間の中の一室になかんずく祝典用の部屋で襖の表面に施された素晴らしい刺繍と絵画に我々は感嘆する事が出来た。こちらでは総てが喬木と潅木であったりあちらでは菊であったり、そしてまた鴨と孔雀であった

りして、それらの題材は興奮させるほど変化して生きている様で自然に忠実な表現の題材として芸術家達に役立ったのだ。これら総ての傑作は欧州に届いた製品とは全く違った種類の古い日本芸術の本質の理解を解明するのに相応しいのであるが製作が終了した後に壁に貼られるが芸術家に対しては水平に置かれる長い巻紙に描かれているのである。日本では古い昔から縦の平面に直接に描かれた絵画は一般的に非常に少ないからである。

迷路の様に配置された庭園を通って私は門主の居館[108]に導かれた。カトリックの司教達に使用されているものと似通った紫色の衣装で門主[109]は我々を迎えた。この宗教指導者は日本では最高の宗教顕職者の一人でありこの宗派が満喫している名望とこの宗派の本山である京都の西本願寺の長は全国の教団の業務を統括しているという状況の帰結である。1876（明治９）年に今上天皇が既に600年以上前に死亡していた真宗の開基者に見真大師と言う諡号（シゴウ）[110]を与えた。大師とは偉大なる師という意味だ。その事は一つの高度な顕彰であり、この仏教宗派の改革への努力が動いた方向の認許であると見なされたのだ。この威厳のある真宗の管長が我々を雪の様な形の果物の氷[111]と私が大いに努力して無理やりに押し込んだ非常に強い甘味の菓子で歓待してくれた後で我々は人力車の車列を列ねて宿舎に戻った。車列に組入れられ我々に配属された高官達や警官達、更には、かなりの数の記者達が加わったので車列は益々長く成ってしまった。自分の職業に没頭する熱意で判断すると記者達は欧州の同僚に引けを取らない。

午後には買物をしたが京都はその点では豊富な機会を提供している。勿論の事ながら大規模で有名な店は価格は不快なことに外国人との商売の為に設置されている。それで私は進歩的に英文で骨董店と言う看板が掲げられている商品倉庫の様な店舗を避けた。私の歩みは脇道に所在している小さな商店に向けられた。そこ私は同じ様に素晴らしい品物が高級店に於けるよりも遥かに廉価であるの発見した。

南から北へ向う見渡せない程に長い線と東から西に延びる街路の比較すれば短い延長で構成される規則的な都市計画が方向感覚を非常に簡単にする。その事は我々が一つの店から他の店にかなりの距離を進めば進む程に評価出来た。他に気が付いた事は京都市内での距離は太閤様が建設した三条大橋から計測されると言う事だ。至る所で公衆を支配する清潔さと我らの国ではいつも不機嫌な管理人によって行なわれている水撒きだが京都に於いては家屋の前の街路への水撒きはより良く営まれていると言う状況が目に付く。

人力車での走行中に一つの小さな工場を認めた。そこでは当地では普通である殆ど手工業的経営から殆ど脱していないやり方で非常に魅力的な陶器の商品が生産されている。簡単な仕事は子供たちと女達に難しい仕事は男達に割当てられている。一般的には製造工程は工程と使用される補助手段に関すると原始的な印象を私に与える。それにも拘らず部分的には広範囲な分業を通して達成される製造速度が驚異的である。と言うのは、人形のかたちが轆轤で素早く形成され短い時間の乾燥過程を受けてその上に彩色される。最後に職長が物体に人間その他の装飾の略図を素描すると若干の絵の具と若干の筆のタッチが各人

によって追加される様にこの芸術作品が最終的に炉に入って完成されるまでこの物体は手から手へと流れて行くからだ。

陶磁器産業の所在地は鴨川の左岸に位置する清水地区にあって同名の寺院を見物する為に通り抜けた。ここでは主として国内需要に向けた商品が最造販売されているが既に何年か前から外国風の趣向と輸出の為の生産が始まって輸出は1868（明治元）年以来急上昇している。日本の陶磁器産業は土着のものではなくて太閤様が朝鮮と支那を征服すべく出兵したあの遠征の現在に残った成果である。薩摩や肥前や長州やその他数多の大名が当時朝鮮から職人達を連行して来たのであってその職人達が日本の陶磁器産業の創設者となったのである。

夜になって我々は最大の茶屋の一つ[112]を訪問した。そこでは舞子達がその技芸を披露したが私はその振付の完成度にたいしても楽器の伴奏がついた歌唱に対しと同様に殆ど喝采する事が出来なかった。茶屋も踊子達と歌い手達の通常の演技も初めての場合は目新しさの魅力があり必ずかなりの程度の興味を呼び覚ます事が出来るが私は茶屋に対してや人形の様な感じの美女の演技に対して欧州人が熱狂するのに同意出来ない。

８月９日、京都にて

我々が滞在する家屋の近くの同じ敷地の中に新しい憲法がその様な幽閉生活に終りを齎すまで何世代もの天皇が民衆の目から秘匿されて生活し死亡した歴史的建造物が所在する。一群の宮殿建造物は広大な平屋の建物から構成されている。それらの建物は既に我々が到着した際に認めることが出来た様に他の日本の建物とは異なり実際に素っ気なく冷たい印象を与える。殆ど何処にでも欠かせない様な優美な小庭園がここでは埃の多い砂地の中庭で代替されている。我々は清涼殿と呼ばれる殿堂を見物した。この建物の一連の部屋は以前には天皇の実際の居住場所であったが後になって一定の祝典を挙行するのに用いられた。天皇の即位の場所である謁見の間には白と赤と黒の絹製幕の天蓋で一段と高くなっていてその前に二つの青銅製の像が大口を開けて警護している玉座が私の注意を惹いた。他方、壁には支那様式の絵画が人目を引いている。宮殿の常御殿と呼ばれる部分は天皇の私的な居室を包括している。訪問者が殆ど道に迷ってしまうかも知れない程に無数にある宮殿の部屋には此処其処で我々は美しい壁画を認めた。しかし殺風景な第一印象を隠す事は出来ない。その様な印象は宮殿の内部に対しても言える。私が仮に非常に芸術を好む民族の支配者たる日本の天皇であったとすれば自分の宮殿をより華麗に装飾し、より居心地が良い様に建築するだろうに。特に私の人生が静かな隠棲の中に流れて行くのを見る様な運命が与えられていたらである。

以前の将軍の城であった二条城に向う途中に絹の織布場[113]を訪れた。そこでは主として輸出に宛てられる商品が生産されている。それらは日本繊維産業の優秀なる製品のほんの一部でしかないと言われている。技術的な工程は本質的には我国の似たような企業で一般

的なのものと同じである。京都の絹織り職人達はこの都市の北西地区にある西の宿営地と言う意味の西陣を本拠としている。業者達の数は相当の数である。絹の生産が日本での財貨の生産の中で大きな役割を果たしており絹は価値高き輸出商品となっている事に対応しているのである。欧州に於いてと同様に日本に於いてもこの生産部門はあらゆる種類の難局に対して少なくとも蚕に齎らされる疾病に対して闘わなければならなかった。この様な状況の下で蚕蛾(カイコガ)の代りに桑の葉を常食にして特に綾織と緞子状の縮の生産に効果的に利用されている明るく輝く繭(マユ)を提供する様な山繭蛾(ヤママユガ)[114]を使用しようと試みるまでになっている。

二条城は1601（慶長６）年に家康により京都訪問の際の宿泊所として建造されそれ以来1868（明治元）年に天皇の所有に移るまで徳川将軍家の宮殿として機能した。要塞のような外観、特に櫓で防御を施した塀を有する巨大な外観は門への豊富な高肉彫りが御所よりも多くの芸術的感覚と華美愛好を現してはいても訪問者が内部でどの様なものを見る事になるのかを予測させない。次々と続く金で満ち溢れている広間を通り抜けると童話に出てくる様な魅力が我々を包み込む。見事に描かれた壁画が我々に新しい芸術形態を見せながら鈍く輝く背景から際立っている。我々が今まで日本絵画の繊細さと細部描写に感嘆していたのに此処では日本絵画の雄大な傾向を否認出来なかった。他の総ての部屋は壮麗さに於いては以前の将軍謁見の間によって目立たなくなってしまう。その部屋の金の装飾は訪問者を実際に眩しくさせるが将軍に非常事態が生じた際には一瞬の内に対応できる様に謁見の間の隣の間に秘匿されている武装した者達が一瞬の間に助けに出られる事を可能にする隠し扉がきっとあるという恐ろしさをこの華麗さが隠す事は出来ないのだ。

日本のロスチャイルドであり国内の鉱山の御蔭で何百万も稼ぎ巨万の富を支配する三井と言う名の銀行家[115]が私に彼のごく最近完成したばかりの家を訪問する様に頼んで来ていた。私は喜んでこの招待を受け新築の宮殿の玄関でこの所有者であり愛想良い目つきをした小柄の男による何回もの御辞儀と長い挨拶による歓迎を受けた。見物してみるとその建物が非常に選りすぐりの木材や壁土や紙で様式に適って建築されており感じの良い小さな庭で囲まれている事が分った。内部はそれに反して欧州の趣向と快適さに近似はしているが和風の部屋の調度品に調和していない事を示した。欧州から取寄せたけばけばしい色の布が目立っている安楽椅子やどっしりした戸棚や分厚い絨毯とはあまりにも大きく対照的に掛物が掛かり安直にも畳が敷かれていたがこんな矛盾もこの家の主人には舶来品に魅力を呈して気に入っている様にみえた。三井は動物が非常に好きとみえて庭に対した廊下のところの金網製鳥小屋の中に二番(ツガイ)の鶴が気取って歩いている。その鶴の一番(ツガイ)は日本産でもう一番(ツガイ)は朝鮮産である。他方、上品で非の打ち所が無いほど清潔に保たれている木製の鳥篭の中に日本で見られるの殆ど総ての鳥類、特に鳴禽(メイキン)類、の代表がいた。囚(トラ)われの鳥達の中に羽毛が欧州の親戚と同じ色合を示している堅菓縣巣(ナッツカケス)を認めた。三井氏は清涼飲料水の支度をさせてそれから梟(フクロウ)と箆鷺(ヘラサギ)の剥製を贈ってくれたが残念ながらそれらの出来はかなり悪かった。

今まで祭壇が有名である寺社のみをを見物して来たので今度は東本願寺も実見したいと思った。西本願寺の兄弟寺院であるこの寺は1864（元冶元）年に火事の餌食となった。当時の法度に反し天皇の身体を拉致する意図で京都に姿を現した数百人の長州藩士と首都の守護の為に集結していた部隊との間で火を噴いた血腥い戦闘[116]の際にであった。計画通りの施設であり真宗の教義に厳格に対応した様式であり同時に非常に高尚な関係で相互に立脚している規模と華麗なる仕上がりでこの都市の名所を形成する事になるであろう仏教寺院がこの地に出来上がろうとしているのを認めさせる事が出来る程に建築はかなり充分に進行していた。私が特に驚いたのは建築への寄進として日本の全国各地から提供された巨大な木製の柱であった。この建築現場の欅（ケヤキ）の木で出来た柱だけでもって一つの森全体になってしまうと思われる。欅（ケヤキ）は楡（ニレ）科に属し強靭性、伸縮性、耐久性で知られていて、造船・家屋建築から始まって小さな種々の贅沢品の生産に至るまで最も人気のある材料である。東本願寺の建築に当って建物の外観部分には総て欅（ケヤキ）の木が、それに対して他の部分には特に屋根の工事には檜（ヒノキ）が充当された。ここで加工される檜（ヒノキ）は実に巨大な原木であるが強烈な応力を克服する事が勿論出来たのだ。この寺の長さは74メートル、幅は52メートルに達しているからだ。

我々の前に横たわっていて腕よりも太く人の背丈の高さがある２巻の綱は重量のある丸太を引っ張り上げているのであるが説明によると女性の髪で製造されているとの事だ。この様な目的には一般には全く使用される事なく我々によっては他の作用に於いてのみ賛美される材料をこの様にして用いるのはこの寺院の建設を始めた際に重い丸太を引くと多くの綱が切れてしまいその結果として不幸な事故が繰返され、女性の髪で編まれた綱のみが重量を停止した状態で担う事が出来更なる事故が避けられると１人の僧侶に予言させた事に帰結するのである。この予言に従い沢山の婦人達と少女達が寺院の建造の為に自分達の毛髪を犠牲にして必要な綱の製造の為に捧げる決意をしたのだ。そして見てみよう・・・・本来はやっぱりより強い性がこの場合にもより強い性であると実証されるのだ。というのは女性の毛髪が太くて烏の様に黒い綱を編んで、この様に何年もの間に寺院建造の際の卓越した奉仕となったので予言をした僧侶が魂を吹込んだ信頼が正当化されているのである。私は普段は綱の一部を故国に持ちかえる為に切断するのを常としている訳ではないし珍品の収集を増やす為に非合法的方法で珍品を自分のところに持って来るのを常とする訳でもないが私は此処では自分の原則を逸脱して私の獲物と共に故国に持帰る為にこの綱のごく一部を秘密に切断させたのだ。

我々は朝食を急いで摂取してからまた種々の買物に専念した。特に故国の友人達に贈呈出来る様な絹布と着物を入手するのに努めた。我々を支配した買物意欲は大きな範囲に知れ渡っていたので店舗の前の街路には民衆が大勢集まって我々の振舞に視線を走らせていた。私自身は安全が脅かされるなどとは全く感じなかったのであるが、その間、制服警官と刑事達は私の安全を護るために忙しげにあっちやこっちに駈け回った。この様な状況の

下で買物をする事は容易ではなく値切る事など出来なかったのは全く明瞭であろう。

夜遅くに開催された晩餐の直前に古い日本の装束を着用した京都の貴族[117]諸君によって私に敬意を表するために蹴鞠が演じられた。小さな円周に限定された空間の内部で一つの球を蹴り上げて既に同様に球を引継ぎ次に伝え済である隣人に到達させる事が蹴鞠の演者によって為されるのだ。演者の熱意と適応能力に感嘆すべき動機の総てを私は感じた。演者の中には花盛りの若き良き時代が既に過去のものと成ってしまっている何人かの諸君が見られたので、それだけ一層多く感嘆したのだ。卓越した特有の印象を演者達が与えたのは演者達が大抵はぱっとしない燕尾服やフロックコートを着用してではなく遥かに良く似合う民族衣装を着用していたからだ。

８月10日、京都から大阪へ

今日は大阪への行楽であって奈良への行楽と並んで旅程に加えられたのである。大阪に向かう列車は我々を乗せて京都へ向う際に確かに夜ではあったが既に通った同じ路線を進んだのだ。我々が通り抜けたのは魅力的な緑で覆われた地域であって独特の点景物として無数の釣瓶井戸や足踏水車が土地を潅漑する為に点在している。竹林が延々と広がる水田の単調さを心地良く中断する。列車は殆ど乾ききった小川やちょっとした川のちょろちょろと流れる細流そして最後には神崎川と淀川の河床に沿って絶えず前進した。

更に進行すると煙を吐く煙突の付いた無数の工場の全く絵画的でない眺めが大阪到着を予告した。大阪は人口が473,000人を越える都市で商工業の中心地と言う性格を有している。我々が最初に側を通り過ぎた建物は蒸気機関で駆動されるビール醸造場であって大阪住民の産業の誇りであり又その渇きを充足できるだろう。

私の行楽を出来る限り御忍びのものにする緊急の御願は承諾されていたのであるが警察が私に対して敬礼しなくなった事を除いては他の総てが以前のままに留まった。それで当地でも駅頭での歓迎式典や高官達の紹介が又もや行なわれた。道の両側に整列する将兵の間を進む凱旋行進に対しこの都市の野次馬どもが押寄せた。大阪衛戍の全部隊が集まって観兵式を行なう事が本来は計画されていたのであるが私は感謝しつつも断った。老陸軍中将の指揮官[118]は失望したのでその代わりに大阪城と砲兵工廠[119]を訪問する事には同意した。

４台の御料馬車は高速度で先ずしばしば日本のヴェニスと呼ばれこの都市の東側に所在する淀川の左岸に位置する城郭に我々を運んだ。淀川から発する不潔な水が流れている多くの運河が大阪南部を貫通している点だけはこの様な比喩が事実に合致するのである。

要塞の入口で将校団長である陸軍中将[113]が私を出迎えて庁舎[120]に案内し長い挨拶をした後に要塞の写真や見取図を贈呈し茶菓を提供した。この城塞は建築施設や防御施設が規模はより小さいが[121]が熊本の城塞に似ている。５～７メートル幅で12メートルの長さにまで達する巨大な花崗岩の塊で作られた囲壁と二重の深い水濠で出来た巨大な建造物が姿を見せている。この様に巨大な花崗岩の塊をこの要塞建造時に存在した技術手段で動かして重

ねて積上げる事がどの様にして可能であったのかは全く想像を絶する様に思える。注目すべきは城の濠の内岸と外岸の壁が直線的な一定の角度ではなくて曲線状に取り付けられている事だ。囲壁の端の上に湾曲した仏塔の様な屋根を有する日本の城塞に特有な城楼が聳え立っている。しかし残っている城楼の数は僅少でしかない。時の経過とともに多くが大火事の犠牲となったからだ。それで現在はこの要塞は全般的に瓦礫の中に所在する。第２環状囲壁の内部に所在する宮殿[122]は日本で最も華麗な建物であったとの事であるが1868（慶応４）年に火災に平らげられてしまっていた。しかし今日に於いても我々が目にする廃墟は感銘を与え無言の強烈な声で首都京都への鍵として狂乱怒涛の時代に日本史の決定的な出来事に於いて重大な役割を演じこの国の輝く名前と結び付けられているこの城塞の誇るべき歴史を物語るのだ。

難攻不落であった大阪城の廃墟[123]が現在所在している所には嘗て真宗の非常に有名な僧院[124]が立っていたのだが1571（元亀２）年[123]に信長[125]の命令で破壊された。信長は戦争の運と勇敢さで最強の封建領主達のところから躍進して天皇からこの国の鎮定に任じられ将軍[126]を思い切って追放し任命する事が出来た[127]。キリスト教会史は信長を称賛している。彼がキリスト教徒を保護し他方に於いて堕落した仏教の彼の大胆な計画に反抗する僧侶達を迫害したからだ。大阪の僧院[124]を破壊する命令を確認する信長の言葉は：「これらの坊主達は我が命に一度も服さずに常に悪しき者共を支援し官軍に反抗してきた。自分が彼らを今の内に始末しなければこれらの苦境は更に続くであろう。その上に自分が聞く所ではこれらの僧侶達は彼ら自身の則を踏み越えて魚を喰らい煙草を吸い妾を囲い読経して御祈りする代わりに経典を巻いてしまう。坊主どもはどの様にして悪しき事に対する監視員となり正義の見張人となる事が出来るのか。」であった。それから火と剣が僧侶達の責務を果たしたのだ。その後暫らくして太閤様が破壊された僧院[123]の跡地に大阪城を築き何年か後に更に強化しその目的の為に17,000戸と言われる家屋が取壊されたのだ。キリスト教徒達の迫害に関して言えば大阪はキリスト教徒と不平分子の避難所だったので既に1615年には徳川幕府の創始者である家康とその息子の秀忠によって放火され制圧された[128]。封建制度の崩壊と天皇統治の復活[34]の際には大阪は徳川幕府の没落を見る事になり天皇親政の基礎固めと開花をも見たのだ。1868（慶応４）年に大阪城に徳川家の最後の将軍[129]が陣営を張っていたのであるがこの城塞も都市も維持する事が出来ず１隻のアメリカ船[130]で逃走しなければならなかった。この城を呑み尽くした炎の中に幕府と旧来の封建制度も没したのである。

大きな歴史の思い出の地に今や平和の工作物にして大きな貯水池が建設される。その貯水池はきっとこの都市に新鮮な水を供給するであろう。城塞の高地からの市街と郊外への眺めは素晴らしい。更に遠方には大きな蒸気船達が内海に航跡を残しているのが見えた。

息詰る様な酷暑の下で砲兵工廠を訪問するのには幾分は面倒ではあったが私はそれを後悔しなかった。日本兵器産業の水準の高さを私が納得出来る機会を提供してくれたからだ。

日本が短い時間で関係する総ての欧州の機械装置に習熟する事を達成したのは正に奇跡をであったのだ。まさに砲兵工廠に於いては７センチ山砲から新設された幾つかの要塞に据付けられる予定の40センチ要塞砲[131]に至るまでの多数の火砲を製造していた。総ての適切な海岸地点や総ての海峡や総ての岬に要塞を設置し立派な防御設備を施す事を日本政府は入念に配慮しているからだ。この砲兵工廠には最新設計の機械が装備されているので鋳造過程から素材の状態で来る砲身を最短の時間で完成させ調整しているのだ。広大な工廠の多くの空間では銃砲弾の生産が大規模に行なわれている。勿論の事ながら小銃修理実施施設や砲兵用の砲架や弾丸収納用の前車箱や鞍具の製造の為の木工細工や車輪細工や皮革細工に必要な補助機械装置に欠ける事がない。私は皮革加工工程での総ての皮革材料と鞍具と鞍下敷毛布を詳細に見学したが鞍下敷毛布はここでも薄すぎるし鞍具は過小の抵抗能力しかなく製造されているのを認めた。それらに対して我国で要求される持続能力を期待する事は殆ど出来ないであろう。この砲兵工廠は現在既に外国への納品を受注しておりポルトガル政府に対して若干の山砲を製造した[132]。

砲兵工廠の視察の後には将校倶楽部[133]での豪華な昼食が続いた。その朝食には将官たちと知事が出席した。将校倶楽部の建物の外観はヨーロッパ的特長を有したが内部は日本的特徴自体を有していた。その日本的特徴は芸術産業の物品の小さいが興味深い蒐集[134]によってより強く目立った。青銅製の花瓶に立てられた富士山の高地から運び込まれたと言う大きな氷塊が快適な冷房を齎した。昼食の際に知事[135]は明朗活発な状況を惹起した。健康が衰えて医師によって酒を楽しむ事を禁止されているがコニャックだけは許可されたものと見なして果敢にコニャックを享受するであろうと彼は断言した。

湊町所在の駅[136]から鉄道で奈良に向う為にやっと出発となった。この鉄道路線は水路が縦横に走り至る所に稲が植えられた平野そしてその後に丘陵地を横切って第一に河内の国を南東に向う。河内の国は奈良を中心地とする大和の国と同様に五畿内に属している。それから路線は両国の国境を形成する山脈にある王寺駅[137]に至り北東に弧を描いて奈良の市街に到着する。しかし当地奈良に到着する前に法隆寺に停車し半時間足らずしか離れていない寺院を訪問した。

人力車を走らせると間もなく寺院がより正確に言えば小さな街の家屋に等しい寺院建造物の集合体が私達に見えて来る。それらの建物は絵画的な構成と結び合って快い林苑の中に所在し小さな礼拝堂と青銅製の水桶で飾られた回廊と階段に連結している。

我々が一巡した際には至る所で一方は黒色の他方は赤色の怖い顔をして威嚇している見張人によって警護されている門を通り抜けた。この寺院は聖徳太子によって建立され607年に完成した。この寺院はそれ故に現存する最古の仏教聖域である。その内容豊富な芸術財産に対して政府は寺院を維持する為に相当な金額の献呈を決定しているだけではなく同様にこの聖地の保存に努める協会の設立のきっかけを作っている。

夢の広間という意味の夢殿は八角形の建物で観音の女神に奉献され1100年まえに製作さ

れた聖徳太子の肖像画の側に600年前の観音の肖像画が掛けられている。その後にある大きな建物の中の一つで一部は1069（延久元）年に製作された壁画で修飾されている建物の右翼に聖遺物として仏陀の左目瞳の虹彩が保管されており御昼には常に信者の参観が許されている。左翼にはここでは悪夢から覚めるのを助ける観音の女神の肖像画がある。長い囲みに取巻かれた本堂は仏陀や他の偶像を表示する多くの肖像画を収めている。その内の三つは盗難に遭った彫像の代替物として1231（寛喜３）年に新しく設置されたのである。病気を治癒する仏陀である薬師如来の銅像と忘我の境地に耽る特別に神聖な守護聖人である普賢の木像はゼムイと言う一人の僧侶によってインドから齎されたのである。他の２枚の肖像画も、内１枚は観音の女神を描いたものであるが、インドから渡来したものである。様々な仏教的題材を描写し芸術家の鳥仏師（トリブッシ）[139]と一人の朝鮮人僧侶が描いたとされ日本美術史上に最高の意味を有する壁画がここで最高の価値を有する財宝だとされる。これらの作品の非常に古い歴史は疑いが無いし有名な日本の画家の誰一人として到達した事の無い様式と完璧な描写は朝鮮からの起源を意味しているからだ。

薬師如来に奉納された寺院の建物は非常に特有な作用の光景を呈する。そこの壁は何百何千の剣や短刀や弓や矢や即ち一言で言えばあらゆる種類の武器で覆われているからである。それらの武器は男達が、鏡と毛髪は女達が、供物として奉納したものである。神の御慈悲を受けた事に対し感謝を表する為に奉納した他の諸物も欠けてはいなかった。特に聴覚を取戻した事の象徴としての錐（キリ）もである。我国の耳鼻科の医師たちはこれらの品々と聾状態が治癒された事との関係に対しどんな意見を有するだろうか。

上御堂（カミノミドウ）[140]では巨大な神々の姿が現れる。この寺院で我々が見たのは釈迦牟尼（仏陀）、文殊（超感性的知識の権化）、普賢、四天王（魔神に対して世界を守護する天の王の各々[141]）の描写である。此処で更に見るべきは仏陀の入滅を象徴する一群の像であり天上に生まれ[142]涅槃に没するまでの仏陀の生涯を八景で図解したものである。巨大な画像の一つは長柄槍で悪しき敵を撃退する大天使ミヒャエルの我国では一般的な描写との目立った類似性を示している。最初の一瞬は劇場の小道具置場の様な印象を与える薄暗くて長く伸びる広間にはこの寺院の財宝が所蔵されており当然の事であるがそれらの財宝に対しては非常に高い価値が称賛されるのである。ここでは華麗で実に計り知れない程のゴブラン織り状の刺繍作品や肖像画や多種多様な木製品と青銅製品や仮面や刀剣や巨大な太鼓や銅鑼（ドラ）等々が所蔵されている。鍵が掛けられたままの一連の戸棚にも世俗的な目を奪う様な無数の他の財宝がまだ保管されている事だろう。一巡した後に僧侶達は我々に茶菓を提供し我々はそれを喜んで受けた。我々はそれから奈良へ向かう汽車が待っている駅に人力車で急行した。

綺麗に植林された山脈の麓に建設されたこの都市はこの国の最も古い定住地の一つであると言う名誉を主張する事が出来るが今日に於いては過去でそうであった事の影でしかない。嘗て奈良は帝国の中心を形成していたのであるが桓武天皇が皇居を今日の京都に遷し

たのである。人力車で半時間ほど奈良の目抜通りと何百年ものの杉と檜(ヒノキ)が生え並ぶ長い並木通を走行した後で春日大社の中の林苑内に所在する倶楽部ハウス[143]に到着した。そこが我々の宿舎となるのだ。

この地域の光景の魅力は多数の神鹿によって優美で活気があることだ。それらの鹿は人力車と歩行者の間を安心して走り回り自由に草などを食べている。これらの鹿の保護は1,000年を溯るとの事でありアクシス鹿[144]よりも強くよりずんぐりしているが、その他の点ではかなり似ているのである。角を良く生やしているが殆どの鹿の枝角は八つ以上にはなっていない。この大物猟獣[145]は特別の保護のもとにあり以前には１頭屠ると死罪が科せられたのである。誰の手からでも餌を食べるほど人に慣れているのでその結果として鹿は益々寺院の近くで給餌されている。

時間が遅かったので奈良の名所の見物が出来ず私は林苑の中を歩き廻って鹿に餌をあげた。直ぐに凡そ60頭程の一群の鹿が集まっていた。人に慣れたこれらの動物は文字通りに私に迫ってきて私の袋を嗅いで私がそれら鹿に美味な食べ物をあげるまで落着かなかった。その際に特にずうずうしい一匹が角を押付けて自分の要求を貫徹しようとした。

倶楽部ハウスでの夕食後に廊下の前の芝生で力強く揺らめく松明での照明の下に男性舞踏家[146]や狂言役者や役者による独特の公演が行なわれた。皮切りは豪華な衣装の一人の戦士によって演ぜられる先祖の喜びと言う意味の還城楽と呼ばれる古代支那の舞踏であり、その際に恐ろしい仮面を付けた踊り手が自分の前にとぐろを巻いて横たわっている蛇の周りを回転しながら自分の武器で脅かして最後には扼殺する様に仕向けるのである。舞踏で振付られた筋を多かれ少なかれまともな意味に解釈するのは既に我国のバレーに於いても困難なのであるが、これは当地では私に意味が解説されるまでは全く不可能であった。蛇を食う野蛮人たちが西の彼方に住んでいた事そしてこの蛇が殺害された場面での舞は天皇が自分の敵に対して勝利し凱旋戦士が帰還した事を喜んでいる事を象徴しているのだと言う意味を教えられるまでは、この舞踏の意味を理解するのは全く不可能であった。舞楽よりももっと興味を吹込んだのは戦士が着用していた古い金襴緞子の布地であった。

次に演ぜられたの舞踏は賀殿と言う名で本来はより喜劇的な芸術作品である。と言うのは振付の出来栄えがそうであって残忍な獅子の仮面を身に付けた２人の舞踏家が２匹の獅子の動作を真似してその際に彼らは非常に巧であるのが分ったのだ。この舞踏は1,000年以上前に第54代の仁明天皇[147]の命により藤原貞敏[148]が作曲したのである。

その次に続くのは歌唱付きの舞踏[151]で聖人伝や伝説を主題としており聖アントニウス[150]の誘惑を思い出させる。と言うのは1,100年前に生きていたと言う玄賓(ゲンビン)[151]と言う名の敬虔な仏教僧を誘惑する為に三輪明神[152]が女に変身する。三輪明神はこの僧を微妙で困難な状況を齎す。その結果この聖職者は長い戦いの結果勝利者となる。最初はこの公演は独特の筋と表現の遣り方で非常に滑稽であったが後半になるとかなり単調になった。求愛を撥ね付けられた偽の女神は突然に際限も無く泣き喚くのみであって毅然とした仏の僕(シモベ)は即興の

舞台の片隅にしゃがみ込んで間断なく口汚く悪態をつくのみであったからだ。

最後に役者達が狂言[153]を演じた。この狂言は見えない様に製造された帽子、即ち隠れ頭巾を話の基にしている。主人から過大な打擲(チョウチャク)を受けている一人の童が京都の仏教寺院に逃れそんな状況を顧慮してぴったり役に立つ様に見えない様に製造された帽子を彼に与えてくれと助けを求める。親方はもうこの若者を発見する事が出来ないので一人の僧にこの童を見つけ出せる様にする事を頼むが勿論うまく行かない。弟子が喜んだ事に親方と僧の間の厳粛な殴り合いの中で佳境に入って終了する。

これらの演技は能の舞と言うのであるが我々の耳には対応しない単調な音楽に伴奏されている。その音楽は笙と言う口で演奏するパイプオルガンや胡琴と言い乳鉢の様で金槌で打つ低音を補う楽器や笛と呼ばれる竹製のクラリネットや床に直接横たわった状態で演奏されるチター[154]である琴で演奏される[155]。

８月11日奈良にて、

本日の始まりは皇室の財宝庫[156]の見物である。財宝庫は変なことに東京にあるのではなく当地奈良にある。天皇が自ら財宝庫の鍵を保管する決まりであるとの事だ。財宝庫と言う言葉で普通理解するのは火災に対しても侵入に対しても安全な空間で高価な品々取分け金銀細工や宝石を保管する場所であるが此処には何も無かった。我々が見たのは杭の上で安定している木で建設された鱗状[157]の建物でありピンツガウ[158]やポンガウ[159]で濡れた芝地に立っている干草入れの納屋を思い出させたのである。用途から言えばそれ自身で一つの博物館以上の性格を担うこの建物の内部の戸棚にはあちこちに歴史的にも芸術的にも著名であり価値を有するものが保管されている。ここには以前に祝典の行列に用いられた仮面や金襴緞子の布や絹布や刀剣や弓や矢や華麗な鞍具更には日常の使用に充てられた器具類つまり鏡や匙(サジ)や食器全般とか遂には幸福を齎す石である翡翠から出来た装飾品やその他の多くの興味深い物の他に古くて非常に価値がある掛物などが所在する。

財宝庫から遠くない所に奈良の大きな見ものがある。それは東大寺で見られAmitabhas[160]（奈良の大仏、つまり大きな仏陀）の巨大な像である。この寺院は第46代の聖武天皇[161]によって建立され750（天平勝宝２）年[162]に完成したのであるが火事によって何度も破壊された後の今は新しい形である。我々は建物の外観を見る事は出来なかった。丁度この建物には修理が企てられておりその目的の為に外壁には足場が組まれていたからである。訪問者が靴を脱がなくても立入を許されている寺院の広間にはその大きさによって正に唖然とさせられる様な巨大な仏陀があって金属技術領域での日本の能力の立派な証明となっている。この像はこの国最大の仏陀像であり16.2メートルの高さで２センチメートルの厚さで凡そ500トンの銅分の多い青銅が使用されていて開いた蓮の花の上に着座して造られている。その蓮の葉には仏教の神々の姿が彫刻されている痕跡が分る。他の部分よりは暗い色が付いている首の後ろには輝くように金箔が貼られ総ての方向に差している

木製の後光が上がっている。その後光には６人の仏教聖人の像が平衡を保っている。大仏の右側には聖なる賢者である虚空蔵菩薩の像が左側には全能の観音の像が立っているが両方とも5.5メートルの高さがあるにも拘らず巨大な大仏と比較すると消えてしまう位に小さい。大仏も最初は厚く金箔が貼られていたのであるがこの装飾も時間が経過するに従い喪失されてしまった。

この寺院も大仏自身もその生成は聖武天皇の御蔭である。聖武天皇は太陽の女神である天照からその他の神々が仏陀の顕彰計画に嫉妬しないかどうかの御告げを得、更にその御告げに関する夢を見て気が休まった時に初めて大仏の建立を自分自身で主宰しそれから着手したのである。749（天平勝宝元）年[160]には大仏の仕事が完了した。この仕事はいずれにせよ芸術作品としてよりもその非常な大きさが大事であったのだ。100年以上してからこの哀れな仏陀は頭部を無くしたが直ぐに取戻した。1180（治承４）年の火災[163]で頭部が溶解してしまったが15年後には新造された。1567（永禄10）年[164]の火災では又もや破滅した。後にある私人が大仏を助けて頭部を取得させた。それ以来大仏は自分の1100年以上古い胴体と300年以上を数える頭部を全部保有する事となり最後の火災から殆ど150年間火災の臭いの不快さに身をゆだねてしまっても良き気分を失うことも無く愉快に微笑みながら世界を見ているのである。

厚く層を為す塵が大仏を覆っており、その事を高僧に注意したところ、その高僧が言うには、この事は塵を持込んだ巡礼者の落度である、が更に説明して、大仏は将来はもっと良く清掃されるとの事であった。私の判断よるとこの様な事は宗教的性格を完璧に剥げ落とされている寺院の広間全体に対しも良く事だろう。

この寺院では戸棚に陳列され一部は寺宝である興味深い物品の正式の展覧会が催されている。様々な仏の木像や価値高き聖遺物や楽器や武器と甲冑や仮面や古文書や百人一首の札等々が変化に富んだ多様性の中で見る事が出来る。奈良の商人達は私が当地でも様々な物を入手する気でいるのを確信して姿を現していたので大仏の目の下で直ぐに活発な商売を展開しその様な商売は種々の美術品を有している寺院の外側に固定している屋台に於いても続いた。

東大寺に所属するあるどっしりした楼閣に吊るされている732（天平４）年に36トンの金属で鋳造された巨大な鐘を訪問するのを我々は怠らなかった。この怪物は京都智恩院のものと似ており我々を歓迎して撞木（シュモク）で打ってくれたのだが深く何時までも続いて鳴響く音の清らかさが傑出している。

奈良に対し名声の一部を与えている聖なる林苑の中で高齢の杉と檜の影の下で寺院の一つが広大なその寺院に属する建造物と共に他の多くの寺院を囲んで建っている。至福の静寂さが威厳を有する巨木の領域を支配しているが、それにも拘らず、林苑には真面目な雰囲気がなく、むしろ友好的で活発な表現を示している。至るところで木々の枝のせいで明るく見える寺院の色が際立っており、それらの神殿は薄暗い神殿だなんていうものではな

くて作品の適切な配置に対する建築家の絶妙な理解を証明し美しい景色の中で魅惑的な外観を明示しているからだ。

沢山の汗の露を垂らして第二の月の寺院と言う意味の二月堂と言う高い場所に位置する寺院への無数の段がある長い石段を上方へよじ登った。その寺院は建築場所の丘に張付いている様に見える。その寺院は杭の上に固定されており丘の上に聳え立っているからだ。既に751（天平勝宝３）年[165]に建立されたのだが現在の堂宇はまだ200年しか経過していない。発見された際には生きている者の様な暖かさを発していたという観音の女神の不思議な像をこの堂宇は所蔵する。混乱させるほどに多量の金属製の灯篭が寺院の前面に沿って掛かっており奇妙な魅力をこの建物に与えている。

暗くて高い木々の下で道の囲いとして彩を添える役割を果たしている小さな奉献神殿[66]が両側に並ぶ通りを我々は巡礼しながら紅白の色彩が人目を引く神道の聖域に到着した。この聖域は第三の月という意味の三月堂[166]と称し白衣の神官が我々を出迎えた。現在は幾らか荒廃しているがこの神社は稲荷を祀る多くの独特な分社で著名である。聖なる林苑の中で様々な祭祀を掌る神官僧侶達がそれぞれの職務を隣合せに平和に営むと言うことが際立っている事が特徴とされるに相応しいのである。その様に無数の神々が一緒に生活すると言う敬虔な合意の例を見習ってである。

寺院見物の休みを利用して我々は急いで木刀を買った。その製造は嘗ては非常に有名であって計り知れぬ価値を持つ何本かの名作をも納めたのである。

我々がまだ他の寺院を訪問する為に乗車した人力車が通る道に沿って何千もの奉献柱が[66]両側に立っている。それらの柱[66]は御互い同士が殆ど完璧に似ている。祭壇[167]は大抵が苔で覆われていて台柱には奉納者の名前が示されており上部の小さな石屋根の下は灯火を納める空間を提供している。この様な信仰の目印は非常に多く４列から５列に前後して配列されており偶（タマ）に何らかの美しい青銅の像に入替っている。その様な青銅の像の一つが特に私の気に入った。それは水と戯れる鹿の実物大で非常に上品な輪郭に表現していたからだ。

神道の聖域である春日大社のところで我々は止まった。この建造物は高潔な境遇にそそり立っており煌（キラ）めく様な赤と威厳のある杉と誰もまだ数えた事がないと言われる程の量がある緑の奇怪な形の金属製奉献灯[168]との魅力ある対比の鮮やかな印象を齎す。圧倒的であるのは神社の夥しい宝物だ。それは何世紀もの時の流れの中で蒐集されたのだ。と言うのはこの神殿は遥か昔に遡るからだ。それは既に767（神護景雲元）年に建立されたと言う事で藤原家の始祖である神道の神の天児屋根（アマノコヤネ）とその妻と他の２人の神話上の存在に対して奉献されているのである。

3,000を越える石と青銅の灯篭が側面に並んでいる通りの終りに天児屋根の息子を祀る若宮があった。そこでは我々を歓迎して神楽という古い舞踏が演ぜられた。座って琴を演奏する１人の中年女性に助けられて３人の神官が笛と太鼓の演奏で管弦楽を演奏した。こ

の神社で特別の儀式施行の為に教育を受ると言われる若い女の踊子達が赤の袴と白の上着と薄織の外套をゆったりと着用していた。黒髪が垂れて金色の紐によって緩く束ねられ首筋に下がり造花の冠で額を飾り顔は白い化粧品が厚く塗られて歪曲され唇はけばけばしい赤い色に輝いていた。舞踏はリズムのある前進と後退の動きからなっていた。少女達は時には木の枝を持って時には小さな鈴や扇子を持って優美に旋回しながらこれを舞ったが、それにも拘らず機械操作の人形の様な印象を与えた。

倶楽部ハウスでの昼食の間に曲芸師が稀に見る様な器用さで演じ最後に何人かの同僚と協力して更に幾つかの座興で最善を尽くした。日本流に解釈された道化役には何も欠けるものがなかった。

午後には京都への帰途に付いた。大阪に於いては湊町駅[134]から梅田駅[169]の殆ど１時間掛かった走行の間に西洋からの異人である我々を見物するのを熱望する大群衆を見る機会が充分にあった。

夜の８時に我々は再び京都に入った。この都市に初めて到着した際と同様に御所まで通じる長い道程は長かった。市街は密集して立っている大勢の人々で一杯であり様々な色の提灯で御祭りの様に照明されていた。

８月12日京都にて

桂の滝、より良く表現すれば桂川の急流に到達する為に市外の西の方向へまだ誰も通っていない道を行った。我々はそこで舟下り[170]を計画したのだ。

市街を出て何分かして我々は銀閣寺に停車した。銀閣寺は足利義政[171]の別荘で将軍の位を辞した後の1479（文明11）年に建立された。正にそこは、現在は天皇が京都に滞在する際には散歩出来る様に手入されている庭園であり訪問するように招かれている。この庭園は厳密に日本園芸の諸原則に沿って設置されている。それで矮小な喬木や刈込まれた潅木や曲りくねった道や小さな池や庭園を縫って流れる水路に遭遇するのである。他の国では自然の自由な発展を支援する為に樹枝を伸ばしている巨木を栽培する様に総てが行われているのに対して、日本の園芸技術に対しては縮みへの衝動は特有であって自然を最小限の空間に制限し自然の発展を制約し強制し奇妙なかたちを獲得する特異な努力なのである。それで私が信用出来る様に保証されたのであるが50年もの場合によれば80年ものであっても半メートルにも達していない様な檜や松を私は日本で見たのだ。日本の園芸に於いては自然への大きな愛情が際立っているのは明白であるが、その愛情に於いて自然の偉大さに関する理解が欠けているのであって日本の成員はこれらの事に異議を唱える事は出来なくて自分のところでもただ縮小する事が出来るのみである様に私には思えるのだ。自然を人間により近く引戻す為には総てを可愛らしく小さく矮小に型作りそこに園芸家の思い付きの刻印を押す事が努められている。我々が日本の庭園で見た総ては「可愛らしくて魅惑的」と言う言葉に尽きる。他の言葉でその特徴を表せる事は出来ないのだ。嘗ては義政[169]の饗

宴と接客の場所であったこの別荘の庭に奇妙な形に盛られた白砂は銀砂の壇と呼ばれる。この緑地をさらさらと流れる小さな水車は「月が水浴をする泉[172]」と言う名であり池の中の石は「考察の石[173]」と名付けられている等々。

３人曳きの人力車50台で最初は村落で覆われた平地を通り抜けた。そこには至るところに収穫されたばかりの茶の葉が布の上で乾燥されていた。沢山の荷車が立派な黒い雄牛や小型の雄馬に繋がれて我々に少なからず迷惑となる砂塵を巻上げながら、我々の方へやって来る。街道にそって小さな茶店が群がっている。それらは疲れきった旅人を元気付けるのだ。この様な酷暑と塵芥の下では二重の意味で驚嘆すべき車夫達も所々で一掬の水で生気を回復させるのだ。我々の道はここでは良く整備された山道であって京都の北西に位置する高地に向い峡谷の隘路を蛇行して上昇して行く。この道に沿って我々は植生の魅力を楽しんだ。両側の浪漫的な小道の所に杉や黒檜(クロベ)や松や竹や他の多種多様な木々が険しい斜面を覆って聳え立っていた。最後にかなり長いトンネルを通過した後に尾根に到達した。ここでは保津川と呼ばれる桂川が貫流しているヒロマジ[174]の谷を下り右側の凸凹道を通る１時間の道程の後に山本に、それ故に桂川の急流に到着した。

３隻の小舟が既にここに停泊していた。それらは６メートルの長さに２メートルの幅で薄板を木釘を用いて組立てた全く一風変わった乗り物であって特別の耐久力がある様な印象を与える事は全く無かった。薄板は乗船の際に足を踏み入れると怪しげに撓(タワ)んだのだ。乗組員は４人の屈強な若者達であって１人が舵を取り他方２人が漕ぎ４人目が長い竹竿を使用して岸と河床の岩をかわす重要な課題を担った。

我々が小舟に分乗するや否や果敢なる舟下りも既に始っていてあっと言う間に我々は最初の急流に到達しそこを矢の様に流れ下りた。急流の後に小舟は時には静かに滑るように進み時には目眩(メマイ)を起こさせる様な速度で高く泡立つ水を唸(ウナ)りを上げて進み渓谷を下った。針路を真直ぐに維持する事は決して出来なかった。小舟が最速の流れに乗ると花崗岩の塊が行く手に立塞がるので方向転換するからだ。そしてこの弱い乗り物が木端微塵(コッパミジン)になってしまうと既に信られるのであるが、見てみたまえ、小舟は最も危険な箇所を舵での圧力や竹竿での軽微な刺突によって間近で矢の様に早く通り過ぎるのだ。小舟は度々大きく揺れて轟き亘る波と渦巻の中へ入り込んでしまい床板は地震の所為であるかの如く上下し時折りこの乗り物が石と岩を乗越えた様に感じるが小舟の弾性のある材料は水に対しても岩に対するのと同様に耐えるのである。

舟下りは我々が故国の山間のどこかの急流でやったらとしたら非常に刺激的ではあるが明白に危険なのだ。大事故が殆ど生じていないのは舟子の技と力にだけに帰しているのだ。

舟下りの魅力の増進に魅惑的な光景が寄与した。舟の速度の遅速に応じてこの景色を見物するのに充分な時間を楽しむのかあるいは大急ぎで咄嗟(トッサ)にしか見られないかが決まる。ここでは川の緑の波が下流に向けて雫(シズク)になって柔らかく滴(シタタ)ってくる。そこでは波が進路を邪魔して聳え立つ岩に対して音を立て荒狂いシュッシュッと音をたて轟音をたてどっと流

れる。今や峡谷は幅広くて快くなり同時に激流は終わるのである。浪漫的な渓谷を我々は飛ぶ様に進んだのだ。この川の各湾曲部では我々の眼に異なった光景が姿を現す。時には緑の険しい斜面であったり時には森林で覆われた緩やかな斜面であったりそして時には鋸(ノコギリ)の歯の様な岩山であったりした。時々側面にも峡谷が開き隠された水車がこちらを窺(ウカガ)う。ここそこで小さな茶屋が淡い緑の中から好奇心に溢れて我々を覗(ノゾ)いている。

１時間半がかくも快適に飛ぶ様に過ぎてしまった。峡谷が、桂川、ここでは大堰川(オオイガワ)が名を変えているのだが、が非常に静かな流れになり我々の舟艇隊もここ嵐山に上陸する。春になって桜の花が満開となると京都の住民はとりわけ好んで当地を巡遊し緑の丘が縁取る優雅な僻地[175]と何軒かの茶屋が提供する事が出来る接待の両方を楽しむのである。Utile cum dulci！[176]我々もそこへ行って同じ事をした。有能な宮廷料理人がこれらの茶屋の一軒[177]で美味しい昼食を準備しておいてくれていたからだ。

大成功の行楽を終えて人力車が速度を合わせた１台の御料馬車に乗車し京都に戻り午後には商店を歩き回って在庫を空にしてしまった。

夜には御所で幻想的な仮面と稀に見るような衣装を付けた芸術家が毒蜘蛛に刺された様にいきなり飛び跳ねて荒々しい大胆な舞踏[178]を彼の呼吸が止まってしまう程に演じて退去した。私も直ぐに引込んで自分の宿舎に戻った。

８月13日京都にて

日曜を祝う為にフランス伝道教会[87]での聖礼拝に参列した。それから京都における滞在の最後の日を殆ど完全に買物に充てた。店舗の所有者達も我々がもう戻って来る事は無いのを知っていた様で彼らが我々に買物の目的を果たせなくする様な場合には彼らは言い値を値引したのだ。

大気は清らかで天気は素晴らしい。私はその様に感じた。夕刻には仏教徒の様に呼吸し静謐な瞑想に委ね落日の省察で沈思黙考したいと思ったからだ。私は適切な場所を求めてヤアミと言う宿屋[179]に決めた。良い選択であった事が判明した。この旅館は他を圧する丘の上にあり廊下からは遠くまでの見事な展望が楽しめたからだ。日没も私が望んだ通りであった。私は何時間かをここで腰を下ろして静かに過ごし展望に我が目を広げた。我々の下方には巨大な杉の木を有する本来の囲林があり、広がっている市街地の屋根の海から静かな海の堂々たる船の如く寺院が聳えている。遠方には柔らかく波打っている丘陵の繋がりが沈み行く太陽の輝きの下で微かに見えている。私は座って熟考し京都の栄光の時代や古き日本の光輝く時代やこの島国の民が何世紀もの間を英雄的に戦い続けた激しい闘争を夢見たのだ。煙を吐いている工場の大きくて高い何本もの煙突に私の目が張付いてしまったままになるまでの事ではあったが。そしてこの様な腹の立つ眺めによって私は日本に対しても西洋文明の時代が開花していると言う事実を想起させられたのだ。我々は理念ではなくて工場の高くて大きい何本もの煙突を仰ぎ見るのだ。　　(続きと註は次号に掲載。)

Erzherzog Franz Ferdinands Japan-Besuch 1893 (Teil 3)

Hajimu WATANABE
Graduate Schcool of Science and the Humanities
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received September 30, 2005)

Am 7.August vormittags früh fuhr er mit dem《Jaejama》von Mijaschima nach Mihara ab,dem damaligen Endpunkt der Sanjo-Eisenbahn, von dort mit dem Zug weiter nach Kioto. Unterwegs hielt der Zug in Okajama, wo er nach dem urspünglich festgesetzten Programm bleiben und übernachten sollte.Dort drängte sich eine tausendköpfige Menschenmenge in der Nähe des Bahnhofes. Aber er stornierte dieses Programm und fuhr nach kurzer Begrüßungszeremonie des Bürgermeisters weiter nach Kioto, um eine längere Zeit dort genießen zu können.

Am 8. August um 1 Uhr früh kam er in Kioto an und wohnte in dem kaiserlichen Palast. Schon früh am Morgen fing er die Besichtigung von Kioto an. Er besuchte den Tschiion-in, den Kijomitsu und den Nischi-Hongwanschi.

Am 9. August besuchte er den Komplex der kaiserlichen Palastbauten, das Haus des Mitsuis, der Rotschild Japans sowie die Baustelle des Higaschi- Hongwanschi.

Am 10.August fuhr er mit dem Zug nach Osaka, besuchte die Burg Osakas und besichtigte das Arsenal. Er fuhr weiter nach Nara und besuchte unterwegs den Horjudschi bevor er endlich sein Ziel Nara erreichte.

Am 11. August begann er die Besichtigung der kaiserlichen Schatzkammer und besuchte den großen Budda, den Nigwatsudo und den Kasuganomija. Nachmittags trat er die Rückreise nach Kioto über Osaka an.

Am 12.August besuchte er Ginkakudschi und fuhr dann mit dem Boot den Hosugawa bis Araschijama ab.

Am 13. August wohnte er der heiligen Messe in der französischen Missionskirche bei, um den Sonntag zu feiern. Die Atmosphäre war rein, das Wetter herrlich so fühlte er sich denn gegen Abend buddistisch angehaucht und geneigt, sich ruhiger Beschaulichkeit hinzugeben,in Betrachtung des Sonnenuntergangs zu meditieren.

Literaturverzeichnis (3)
39) Herausgegeben von Wolfgang Häusler, Geld, Wien 1994
40) Wladimir Aichelburg, Register der k. (u.) k.Kriegsschiffe,Wien, 2002
41) Münze Österreich, Land in Sicht,Wien,2005